
涼宮ハルヒの別冊

涼宮ハルヒの小説を思う存分書き上

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの別冊

【Nコード】

N3975M

【作者名】

涼宮ハルヒの小説を思う存分書き上

【あらすじ】

本家ではない、私オリジナルのストーリーで書かせて頂きますm

（ ） m

設定は本家同様とさせていただきます（ ） m

ハルヒ、みくる、長門、キョン、古泉、鶴屋さん、朝倉、その他

キヨンのクラスメート、古泉の関係者（森さん）等はいる設定とします

本家を読んだこと、みたことがない方は理解しがたいかもしれませんが、最初に軽くキャラクターの紹介等を書きますのでご心配なさらずに読んでください。

是非涼宮ハルヒの小説が好きな方、それ以外の方も是非読んでください
（――）m

この小説から、本家の小説を読む方が増えたら幸いです

あと、本家並みな難しい言葉やワードセンスはないと思いますが、そこはご了承ください

では、よろしく願いますm（――）m

プロフィール

プロフィール

† 涼宮ハルヒ †

SOS団団長

謎が多い女子高生

宇宙人によると『進化の可能性』

未来人によると『時間の歪み』

超能力者によると『神』

† キョン †

一般的な男子高校生

SOS団団員

常に被害者

† 長門有希 †

宇宙人（正確にはなんちゃらかんちゃらヒューマノイドインターフ
エース？）

SOS団団員

† 朝比奈みくる †

未来人

SOS団団員

ハルヒ曰わく萌えキャラ

SOS団専属のメイドさん

†古泉一樹†

超能力者

SOS団副団長

インチキ解説者

偽善スマイル野郎

プロローグ

プロローグ

桜が咲いて春がきた、と思えばもう夏になっていた、と感じたことがある人も少なくはないだろう。

少なくとも中3までは俺もそう感じる内の一人だった。

まあ、中3の頃はそこそこ勉強にも励んでいたし、少しは季節の流れが遅いと感じたりはした。

だが、俺が生きてきた15年間よりも200倍は季節の流れが遅い一年が停滞前線のウルトラバージョンの如く俺にまわりついている。

更に、俺には現実を見極める能力が備わっている。

まあ、一般人ならば誰でももっているものだろう？そんな能力くらい。

サンタクロースは現実的に言えば父親で…二次元のキャラにいくら恋したところで、その恋が実ることはなくて…歌手だの漫画家だのそんなのを目指してもなれる可能性なんてほぼ0に近いわけで…、まあそんなことくらい誰でもわかっているだろう？

そんな夢をみていいのはよくて中学生までだ。

しかしながら、そんなフェルマーの最終定理を証明することのほうが簡単とも思える俺の、いや、一般人の方程式をいとも簡単に壊し

やがったやつがいる。

俺の季節の流れを狂わせ、俺のとおきの方程式をいとも簡単に壊しやがった非常識人…

そう、涼宮ハルヒである

スペシャルコース

スペシャルコース

季節は夏

俺はいつものように自称早朝ハイキングコースという高校までの坂をひたすら登り続けている。あー暑い、なんでこんなに立地条件の悪い場所に学校を建てやがったんだ。

と、いくら悔やんでももう来ちまったもんは仕方ねえ。
まあ、俺はもっと大きな問題を抱えているんだがな…

「よう、キヨン。しけた面してんなあ。」

あー、また暑苦しいやつが来やがった。

「この坂道をしけた面以外で登る価値はこの坂にはねえ。」

こいつはアホの谷口、俺のクラスメイトであり俺よりアホなやつである、まあ俺も言えた立場ではないがな。

あ、SOS団の準団員のな位置であることも一応説明しておこう。

まあ、ハルヒは金魚のフンに含まれる1原子くらいにしか思っ
てないだろうがな。

「なんだなんだあ？俺の顔にご飯粒でもついてるか？まあ、俺今日
は朝パンだったんだがな。はっはっは」

正真正銘のアホである。

「なあ谷口、お前はなんのために学校にいつてるんだ？」

「はあ？バカじゃねえのか。いまのところ俺が学校に行く理由なん
であるわけないだろ。帰宅部で理由があるやつがいるとしたら、そ
いつはただのガリ勉野郎か恋人といちゃついてるかのどちらか以外
考えられん。」

「どこのインチキ解説者だ、お前は。」

「はっはっは。」と、誰がどうみたってくだらんアホトークをして
いる間に俺たちは学校へたどり着いた。というよりたどり着いちま
ったという表現のほうが正しいかもしれない。

「はあ」

思わずため息がこぼれた

授業が辛いとか眠いとかそんなミジンコくらいの理由でため息をこぼすやつをうらやましくおもうね。まあ、俺も昔はその1人だったんだが、今はその程度ならアリから噛まれたくらいにしか気にならない。

なんせ俺には、地球消滅の危機にさらされているかのような憂鬱が毎日のように訪れるわけだからな。

力なく俺は教室のドアを開けた。

「遅いわよ、キョン！！」予想通り、朝から一番聞きたくない綺麗なミドルボイスが俺の耳に届いた。

「ああ」

「なに？その顔。アンタはどうしていつもいつもそんなに不幸そうな顔してるの。そんなだからいつまでたってもあたしからこき使われるのよ。」

どんな理屈だよ。そして俺を不幸そうな顔にしているのはハルヒ、間違いなくお前自身だと言うことに気付いてくれ…

と言いたいのも山々だが、俺がいくら攻撃力100000の力で攻撃したところでその50000倍は強い力で反撃してくるのはもうわ

かりきつたことだ。

負ける勝負はするな、それが俺のモットーでもある。

「逆に問う。お前はなんでそんなに毎日元氣なんだ、俺にも少し分けてほしいぜ。」

「バツカじゃないの？あんたの元氣ハツラツとした顔なんて誰も見たくないわよ。どうしてもっていうなら分けてあげてもいいけど。」

「お前はいつたい俺に元氣でいてほしいのか、いつも通り不幸そうな顔でいてほしいのか、どっちなんだ。」

「あんたが元氣か元氣じゃないかなんてどうでもいいわ。あんたはSOS団団員として雑用してくれればそれでいいのよ。」

「どんだけ自分勝手なやつなんだ…矛盾しまくってるぞ。そして俺はいつSOS団の雑用係になっちまったんだ…」

「ま、反論はしないがな。さっきも言った通り、俺は負ける勝負はしない主義である。おっと、少し遅れたがここでこいつ、涼宮ハルヒについて少し説明するでしょう。」

「涼宮ハルヒ、スポーツ万能、頭脳明晰、できないことがあるのかと問いたくなるくらい完璧且つ美少女である。」

「ここまでは誰がどうみたって完璧な女子高生だ。」

だが現実つてのはそう甘くない。そんな完璧人間がこの世に存在してるはずがないのである。

そう、こいつのプロファイルにはSOS団団長という誰がどうみたって意味不明な六文字が含まれている。

SOS団とは、世界を大いに盛り上げるための涼宮ハルヒの団の略称であつて、このSOS団の目的といえば、これまた意味不明で宇宙人、未来人、異世界人、もしくは超能力者と遊ぶこと、世の中の不思議をさがすことらしい。

なんて理不尽な目的だ。いい迷惑だと思わないか？

まあ、詳しい説明は面倒くさいから却下。

ていうか説明し続けてたらキリがないし、悪口の嵐が止まないことは明らかだからな。

はあ、ハルヒのことを思い浮かべるだけで溜め息がでるぜ。

「あんだ、また溜め息したでしょ。」

「いや。」

いかん、回想だけのはずが思わず溜め息として出ちゃった。

「…まあいいわ。それよりキョン、今日は…」

「……」

ハルヒがなにか言おうとしたとき、丁度いいタイミングでチャイムがなった。

だが俺は気付いた、というより気付いちまったという表現のほうが正しいだろう。

いつもならいくらチャイムが鳴ろうが、一度喋り出したら会話が終わるまで…というより伝達が終わるまでひたすら喋り続けるはずである。

なんせ、授業中に大声で俺に叫び出すくらいだからな。

でだ、もう異変に気付いたやつも少ないと思うが、さっきチャイムが鳴った瞬間、涼宮ハルヒは伝達の途中で喋るのを打ち切りやがった。

まさかまた閉鎖空間とかわけのわからないものを作り出してるんじゃないかな。まあ、そこまで考える俺もどうかしてるが…

って考えてる俺までバカバカしく思えてきたぜ。やめだ、ハルヒの

ことはあいつ等に任せるのが一番だ。

と、くだらないことを色々考えているうちに授業が終了した。

そして俺は、いつものごとくSOS団部室…いや、文芸部室に足を運んだ。

未だに同好会としての許可も出てないのに、部室に足を運んでしま
うのはどうしてかね。

コンコン…

「はぁーい」

おお、この天使のような声にはいつも癒されるね。

ガチャ…

「ちーす」

「こんにちは、キョンくん。今お茶入れますね。」

「はい、ありがとうございます。」

そう、この方こそ我がSOS団が唯一誇れるSOS団専属のメイドさんである朝比奈みくるさんである。

というのも、決して彼女にコスプレの趣味があるというわけではない。

まぎれもない、涼宮ハルヒのせいである。

元をたどれば約3ヶ月前、SOS団が発足する前のことである。

彼女、朝比奈みくるさんはめっちゃ可愛い、ロリ顔、胸が大きいというかなり理不尽な理由だけで強制的にSOS団に入団させられたとってもかわいそうな人である。

まあ、今となっては朝比奈さんもメイド姿に定着し、俺としては微笑ましい。

ハルヒによって俺に蓄積されたストレスやフラストレーションも、この朝比奈さんによって解消されているようなものだ。

しかしながら、何度もいうが現実つてのは厳しい。

この朝比奈さん、何を隠そう未来人なのである。まったく未来人っぽくないのもあれだが、まあ朝比奈さんならなんでも許されるってもんだ。許さないやつがいたら、そいつは谷口以上のアホだ。少なくとも俺ならそいつにローキックを一発入れてやるね。

「キョンくん？あの…どうかしましたか？」

「へ？…あ、いえなんでもありませんよ」

「そうですか。今、お茶入れますね」

「あ、はいありがとうございます」

うーん、心が癒されるね。

朝比奈さんがいてこそ、SOS団の存在意義があるってもんだ。

「はい、キョンくん。お茶入りましたよ。」

「ありがとうございます。…おいしいです」

「うふ」

なんて可愛らしい。

まさしく天使という言葉が似合うお人である。

そして、俺に微笑を振る舞った後、部室の隅でひたすらハードカバーを読み続けているショートヘアーのもとへ朝比奈さんは向かった。

「…どうぞ」

「……………」

この2人の会話はこれが精一杯だろう。
俺でさえも一分会話が持ったら上出来なほうだ。

で、今の部室の隅で人形みたいに微動だにせず、いつものようにハイドカバーのページをひたすらめくり続けているショートヘアーで小柄な彼女がが長門有希である。

情報統合思念体かなんかに送り込まれた、なんとかヒューマノイドインターフェース？だったかな。

それがこの長門有希である。

簡単にいうと宇宙人ってやつだ。

朝比奈さんは数ミリ長門の頭が動いたのを確認したあと、黙って長門のあとを後にした。
なんて律儀なお人だ。

そして俺と朝比奈さんは、いつものように古泉の持ち込んだボードゲームで暇を過ごしていた。

まあ、ボードゲームといっても朝比奈さんはオセロくらいしかできないけどな。

ちなみに、古泉というのは…

「こんにちは…おや、邪魔だったでしょうか」

「ふん」

なんてわざとらしい。

朝比奈さん、そんなやつに丁寧にあ挨拶する必要はないですよ。

つてか、古泉のコメントに対する反応はなしですか…
少し悲しいぜまったく。

で、このスマイルイケメン野郎は古泉一樹。超能力者。解説者。説明終わり。要するに、俺からすれば説明するまでの価値もない男つてわけさ。

詳しく知りたいやつがいるなら本人に直接聞いてくれ。
理解不能な解説をひたすら繰り返してくるだろう。

ま、俺がこの古泉から唯一学ぶとすれば偽スマイルテクニックくらいだろう。

ハルヒのご機嫌をとるのくらいには使える。

あ、言い忘れてたが一応SOS団副団長でもある。

「おや、涼宮さんはまだ来ておられないのですか？もう来ている頃だと思い、急いで来たのですが」

「なんだ？今日は何かの日だったか？」

「涼宮さんから聞いておられないのですか？今日は第2回SOS団作戦会議らしいですよ」

「またか」

そしてハルヒ、何故お前は前の席である俺には教えない。

「で、なんの会議なんだ？」

ふと朝比奈さんを見ると、顔が若干ひきつっている。

どうやら朝比奈さんも気になっているようだ。

なんせ内容によっちゃあまた、朝比奈さん自身がハルヒのおもちやとかすからな。

「それはまだわかりません。涼宮さんは内容についてはまだ、なにもおっしゃられていませんでしたから」

古泉は両手をひろげ、さっぱりだという仕草をしてみせた。

まあハルヒの考えることだ、俺たちにとって有益である可能性は0に等しい

まあ俺の役目として、とにかく朝比奈さんだけは守らなければ…

「おや、来られたようですよ」

バン

「遅れてごめん、待った？あと、みんないるわよね？」

誰もお前なんか待ってなどいない。お前が来ないのが一番理想的だったさ。

そしてハルヒは、来て早々1枚のプリントをみんなに配り始めやがった。

「なんだこれは」

「みてわからないの？」

「分かるか。わかっているのはお前くらいだろう」

「なにいつてるのキョン、有希と古泉くんは読めるわよね」

古泉は微笑を浮かべ、長門はいつも通りショートヘアーを1ミリも揺らさずにプリントを凝視している。

「ほらね」

なにが、ほらねだ。まあ、古泉はともかく長門は読めているだろう。ちなみに、俺と朝比奈さんは当たり前にかかっていない、というよりわかっていないはずがない。

何を隠そうこのプリント、すべて英語で書かれているのである。

おいおい、俺はいつから外国人になったんだ？

それともまさか国外旅行でもするつもりじゃないだろうな。

俺はゴメンだぜ。

その前市、SOS団には外国に進出する価値自体ないだろう。

「で、これはなんて書いてあるんだ。」

「勉強よ！！」

「は？」

「SOS団全員で期末試験まで試験勉強をするの。もちろん拒否権はないわ」

「お前はいつたいどこの高みを目指すんだ。これ以上あたまがよくなってどうする。」「あんた：ばっかじゃないの？あんたたちが勉強しないからわたしも一緒に付き合っただけなんじゃない」

「ってか俺たちの勉強時間を、いつも意味不明な都内探索やらで割っているのはハルヒ、お前だろ。」

「いい、キヨン。あんたみたいにSOS団の活動を言い訳にするような人がいるから日本はダメになっていくのよ！！」

いや、日本をダメにしてるのはどちらかというとハルヒのほうが。少なくとも世界を、自分の都合のいいように度々変えているのは確かだ。

「みてみなさい、あたしを。それに、有希や古泉くんだってSOS

団に貢献しながら、しっかりテストではいい点とってるのよ。あなたの発言はただの言い訳でしかないわ」

「しかも、あんたはSOS団の活動においても、あんまり貢献できてないじゃない。遅刻はするし、文句多いし、私に反抗するし。」

お前に反抗しないやつはかなりのお人好しか、弱みを握られている人間くらいだ。

まあ運良くというかなんというか、この団には偶然にもそういうのが集まっちゃったわけだが…俺以外はな

「団長に対する団員の反抗は普通だったらくびよくび、そんなもって私刑よ。」くびにしてくれるなら喜んで辞めるさ。ただ、本当に死刑にされそうだ。

朝比奈さんのメイド姿を拝めなくなるのも辛いな……それにあのMikuruフォルダも別の場所に移さなければ…
いかん、妄想に走ってしまった。

「死刑は嫌だな」

「でしょう？だからあんたは黙って私にこき使われなさい。」

なんでお前にこき使われなきゃならん。

と言いたいところだがハルヒには何をいったって無駄だ。

「ああ、それで勉強するのはなんなんだ？」

何度もいうがロクなことではないことはわかっている。

「古泉くん、今日は何月何日？」

「6月23日です」

「そう、今日はもう6月23日。そしてみるちゃん、再来週にはなにがあるかわかる？」

「え、えーと…夏祭りですか？」

朝比奈さん、そんなに震えなくても…

「おいしい、正解は期末テストよ！！」

どこらへんが惜しかったのか詳しく説明してほしいね。

「まさか、期末テストに向けて勉強するとかじゃないだろうな。」

「もちろん!!」

なにがもちろんだ。勉強したいなら勝手にしてろ、俺も勝手にする。つてか勝手にさせてくれ。

「なんでSOS団で勉強する必要がある。個々でやればいいだろう。」

「みんなの前回のテストの結果を見せてもらったわ。」無視かよ。

「みくるちゃん、キヨン、あの点数はなに？みくるちゃん、SOS団はなんの略かわかってる？」

「え…えーと…涼宮さんを大きく再生…え、え？」

朝比奈さん、それは演技なのか本気なのかどっちですか

「んー…、キヨン!!」

「しらん」

そんな目でみるな、朝比奈さんが天に召されそうな顔をしているぞ。

「世界を大いに盛り上げるための涼宮ハルヒの団」

長門の声は今日初めて声を聞いたな。

きつと次は自分の番だとわかったのだろう。

そんなの答える必要ないのにわざわざお疲れさん

「さすが有希、あんたたちも見習いなさい。」

「で、それがどうした」「世界を大いに盛り上げるためにはねえ、勉強もすっかりできないといけないの。勉強できないと、世界にって言葉が達成されないでしょ。だから最低でも英語だけはできなきゃだめなの。」

「それに国語や数学、理科や世界史、すべて世界を股に掛けるには必要な要素なの。」

「だからなんだ」

ってか世界どころか日本脱出さえできないだろ、いや、してほしくないね。

「だから今度のテスト、あたしを含め全員、上から50番以内に入ってもらうわ、もちろん学年でね。入らなかつたら恐ろしいお仕置きが待ってるわよ、覚悟しなさい!!」

「ひえー」

な…なにを言い出しやがるんだこいつは。

いつも学年で下から数えて50番以内に入る俺に上から50番だと？

俺にとっちゃあ22世紀までにドラえもんを作り出すくらい難しいことだ。

まあ恐らく、朝比奈さんもそうだろう。まあ、俺ほどではないと思うが…

「なあハルヒ、俺にその目標が達成できると思うか？」

あほか、できるわけがない。

人間ってのはいろいろいつて結局は偏りがあるもんだ。

どんなに俺が努力したところで、アインシュタインやらニュートンやらと同じことをできるかと問われると、それは不可能なんだよ。

それくらいハルヒにだってわかるだろう。

しかもSOS団みんなで集まってだと？集中できるわけがねえ。
いつもどおりまったりライフを過ごして終わるさ。

「キョン、よく考えなさい。あんただけじゃ、もちろんできる
わけないわ…でもねえSOS団全員だよ。ゆきや古泉くんだってい
るの。不可能なんてないわ、ね、みんな」

「はい、頑張りますよう」

古泉はいつものスマイルを浮かべながら返事をした。
俺のことをもう少し考えろ。

「よし、じゃあ明日から勉強道具をもってここに集合ね。土日はい
つもの北口に集合して、喫茶店でやるわよ。それじゃ今日は解散！
！明日から頑張るわよ！！」

もう抵抗しても無駄なようだな、おい。

まあ50番以内はともかく、今回のテストは親の機嫌をとるのくら
いには丁度良さそうだ。

そして早々と日は流れテスト二日前…

「もう！…なんでわからないの、こんなの小学二年生でも2秒で解けるわよ」

「す、すすすすいません涼宮さんっつ」

といったわけで、勉強会開始からはや2週間あまりが経過したわけだが、ハルヒの叫び声と朝比奈さんの悲鳴だけがひたすら部室に響きわたり、古泉はいつものように微笑を浮かべ、長門は無言でひたすらハードカバーを読み続けた日々が続いている。

ハルヒの指導のもと、勉強をする俺と朝比奈さんだが…

最終回で話がうまくまとまる漫画とは違い、現実ってのは厳しかったわけであって

才能を開花させるわけもなく、ただひたすら時間だけが過ぎていた。

まあ母親の機嫌をとれるくらいの点数はとれそうなわけで、俺の目標は喜ばしいことに達成されたわけだが

「もうっ、今日は解散！！明日までに絶対ここまで覚えておくこと。いいわね！！」

朝比奈さんと俺に、達成不可能な課題を出した後、ハルヒは部室から出て行った。

褒めてのばすって言葉を知らない奴だ。まあ、褒められたってのびないが

そしたら長門が、ハードカバーを閉じて帰り支度を始めた。

長門が帰り支度を始めたらみんな解散、というのがもうSOS団の決まりみたいになっている

「では、失礼します」

古泉は微笑を俺たちに振りまいた後、部室を後にした

ってか1つ疑問だが古泉、お前は勉強しなくていいのか。

俺はこの2週間、お前が勉強する姿を一瞬たりともみてないんだがもしテストのとき超能力的な力を使ったりでもしたら、お前の命の保証はないぞ、古泉。

「キョンくん、着替えるから先に帰ってていいですよ」

「はい、ありがとうございます。明日までなので頑張りましょう」

そう、やっと俺はハルヒ家庭教師、いや、部室教師？から解放される。

まあ、ハルヒから解放されることはあと2年は確実にないが。

「それじゃあまた明日」

朝比奈さんのメイド服姿を目に焼き付けてから俺は部室を後にした。

そして俺は、脱皮してから7日目の夜を迎えた。たばりぞこないのアブラゼミみたいな体になりながら、ひたすら自転車をこぎ続けていた。

もう7時だったのに、夜という時間を忘れたかのごとく地上に明るい光が運ばれ続けている。

もちろん気温も昼間と殆ど変わらず無益な汗がひたすら流れる。

早く涼しい季節にならないかと願ってはみるが：なんというか、地球はハルヒ並みの自己中かあまのじゃくかなんかであり、俺たちにとって生活し易い春や秋は一瞬ほどしかよこしてくれない。

となると俺たち自身が恒温動物を捨て、変温動物として生きていくしか方法はなさそうである。

なんてことを考えていると、俺はやつとの思いで自宅に着く寸前までこぎつけた。

のはいいが…視界に見覚えのある人影が見えるのは気のせいだよな、いや、そうであってくれ。

「こんばんは、にしては少し早すぎるでしょうか。」

その偽善スマイルを俺に向けるな。

今の俺は一等が当たっている宝くじを破られて発狂しているホームレスくらいの怒りをお前に持つてゐるぞ。

「なんだ」

ききたくもないが聞かざるを得ない。

きかないと更に面倒くさいことに巻き込まれそうだ。

「ちょっといただけない事態が発生しましてね。少しお時間を頂けるでしょうか、この場でよろしいので。」

この場でいいとは言われたものの、俺の疲労は既に限界値をはるかに越えており、本能寺の変で追いつめられた織田信長状態になって

いたため、場所を近くのベンチに移すことになった。

俺の部屋でも良かったのではと言われればそれはそうであるが、古泉を俺の部屋にあげるのはなにかと気が進まない。

あげてしまったらトンデモ解説がひたすら室内に響き渡り、俺の部屋にいつまでも居座る妹とシャミセンでさえ出て行きそうだからな。

そして俺と古泉はベンチに座った。

辺りもだんだん暗くなってきている。

もし隣にいるのが朝比奈さんなら俺は、フラッシュバックを起こした薬物乱用者がやり出しそうな行動をやりかねない。

まあ、しないけどな

谷口辺りなら確実にやるであろう。

「で、何の用だ」

できればハルヒ、機関関係以外でお願いしたい

「先ほどもお話しましたが、ちょっとした不安要素が発生してしまっていますね。」

それはなんだ。

「涼宮さんです」

やはり、またか。

古泉は少し表情を険しくして見せた後、再びいつもの緩やかスマイルに戻して1人黙々と語り始めた

「最近、涼宮さんの精神が不安定な状態にあります。理由はお分かりでしょう？」

ああ、どうせ俺のせいだよ。

「いえ、別にあなたを責めるつもりはありません。朝比奈さんを含め、あなたは既に十分頑張っていると思いますよ。」

お前から褒められてもちっとも嬉しくねえ。

「しかし、涼宮さんはそうは思ってくれていないようです。彼女自身、学問において躓いた経験などは今まで一切なかった。」

無駄に頭だけはいいいからな。まあ、使い方は120パーセント間違ってるけど

「そんな彼女だからこそ問題が発生したんです。」

どういうことだ。

「涼宮さんの中では、勉強はすればするだけ頭に入っていくものと結論付けてあります。しかしあなたと涼宮さんの記憶力、計算力などはもちろん違いますよね？」

一緒なら苦労してないさ。

「例えば、涼宮さんが一時間で50単語を記憶したと仮定します。しかし、あなたの場合は恐らく20〜30単語を記憶するのが限界、あなたと涼宮さんとの間に記憶能力の差が発生します」

そりゃそうだろ。みんながみんな同じ能力を持っているなら、俺にだってノーベル賞を受賞できる。

「しかし涼宮さんは、自分自身とあなたとの差があるとは認識しているものの、あなたの元々持っている力なら学年でトップ30に入れると思っているんですよ。」

そりゃとんだありがた迷惑だな、おい。

「しかし、そんな涼宮さんの考えとは裏腹に、あなたの学力が振るわないため涼宮さんはあなたの努力不足だと決めつけ、そんな団員のだらしなさにイライラしているというわけです。」

なんて自分勝手な。

俺はなにも悪くないじゃないか。

「勝手に言わせておけばいい」ハルヒのイライラに毎度毎度付き合っていたら拉致があかない。

それに、ハルヒの理想を現実に変える力かなにかならず自力でなんとかできるだろ。

「勝手にしておきたいのも山々ですが、残念なことにまた閉鎖空間が発生しつつあります。」

俺には関係ない。とも言えないな。

「またお前ら機関とやらの力でなんとかすればいい。」

「それで住むなら問題はないのですが、どうしてもあなたの力が必要なんです。」

なんで。

「涼宮さんが閉鎖空間を生み出す条件、それはこの世界に飽きたとき、もしくは自分の思い通りにいかないときです。今回の場合は後者にあたります。」
だから。

「後者の場合、普通なら彼女は彼女自信の力でどうにか問題を解消しようと努力されます。しかし今回の場合は、涼宮さん自身がどれだけ努力、足掻こうともあなたたちが何もしなければ絶対に解消されることはないのです」

おいおい、それはなんでも酷すぎるぞ。

「ちょっと待て。俺たちはハルヒの理想通りの成果を出せてはいないが努力は十分にしている。」

少なくともSOS団発足以降、今までで一番努力しているはずだ。

「それはその通りなのですが、問題は涼宮さんがそう思ってくれていないところなんですよね。」

さっぱりだというジェスチャーをしたあと、古泉はいろいろと何か引用して例えたりしながら説明をし出した。

俺の頭じゃ、分かり易く説明されたって理解不能なことをお前も理解してくれ。

「ですから、あなたに協力を頼む以外に方法はないというわけです。

」

というわけですよ。

ってか、ですからなんて言われたってお前の説明じゃ理解できん。

「現在努力しているあなたにとにかく言うのも癪ですが、あなたはどうにか涼宮さんが満足する結果を出せるようお願いします。」

そっつい終えると古泉は自分の役目を終えたような微笑を浮かべ、帰って行った。

1人で満足してんじゃねーよ。

俺の話も聞いていけ。

と言ってもどうせ無駄なことはわかっている。

無駄な努力をしないのが俺なのさ。

そして、俺は自宅へ帰ったあと、部屋にいる妹プラスシャミセンを二言で制し、ヨレヨレの体で無理矢理に机へ向かった。

いつもならベッドに直行、そしてスリープアンドハブアドリームなのだが、今日ばかりはそうはいかん。

なぜなら俺に残された時間は、あと約1日しかないんだからな。

言っておくが、古泉のためじゃないぜ。

俺は世界の安定と秩序を守る、なんて物恥ずかしいことは言わないが、それくらいのリスクがあるのは確かだ。

というか、本当に世界が滅びゆく可能性が高い。

どうにかハルヒの満足するような成果をださなければならない。

いや、まず冷静に考えると、俺という普通のなかの普通の高校生の期末テストで世界の運命が決まるってのはどういうことだよ、おい

世界はそこまでおかしくなっちゃったのか。

国会議員でも総理大臣でも大統領でもいいから、涼宮ハルヒ精神安定対策委員会かなにかでも作って、ハルヒの機嫌を取り続けていてほしいもんだ。

神でもないのに毎回毎回世界を背負わされてはたまらん。

まあ、そんなこんなで俺は黄昏たシェイクスピア状態になりながら

も勉強を続行し続けた。

ちなみに、シェイクスピアも黄昏たりするのだろうか。

そしてまた次の日

部室にはハルヒの怒号が響き渡り、長門は微動だにせずひたすら本に目を落とし、古泉は一人でチェスといった、いつも通りの日常が訪れていた。

唯一変わったとしたら、朝比奈さんの悲鳴が消え、ハルヒの怒号の矛先が俺にのみ向けられるようになったと言ったことぐらいだろう。

つか、朝比奈さんが実はやらないだけで、勉強出来る人だったことには驚きだ。

まあそんなこんなで長門の、本を閉じる音と同時にハルヒから解散命令が出され、俺たちは部室を後にした。

時は流れ、試験前夜を迎えた。

メドレーリレーでいうと自由形という最終泳者を迎えた俺は、妹という水圧を自分のコースから排除し、ラストスパートをかけようとしていた。

恐らくこれが一年生時で勉強する最後の夜になるだろう。

本当に最後にならないように努力しなくてはな。

…と、ん？

俺は突然、ジェットコースターが苦手なりポーターが無理してジェットコースターに乗ったときに感じるような感覚を覚えた。

驚天動地、俺の目の前は一時黒に染まり、次に目をあけたときには有り得ない状況に陥っていた。

「うわっ」

俺は不意をつかれたように喉元から声が絞り出され、しりもちをついた

そう、俺の前には確実にこの世のものではない、魔法使いから魔法をかけられたヒマワリのような巨大人型ヒマワリが視界に捕らえられたのだ。おいおい、冗談はよしてくれよ。

これじゃあ世界平和を守るところか先に俺が消滅してしまうじゃないか

それはともかく…俺は部屋にいて、椅子に座っていて…なんてことはもう問題じゃない。

こんなこと日常茶飯事だ。

またハルヒが絡んでいるに違いない。

「ん？」

俺は辺りを見渡し、再び息を呑んだ。

最初の感覚とは違い、1万テラバイト以上もの恐怖という情報が頭

の中に流れ込んでくるような、最初の10倍はどすの効いた強烈なものだった。

長門、古泉、朝比奈さんがいない。

朝比奈さんとはともかく、あの2人がいないことに俺は驚愕の色を浮かべるしかなかった。なぜなら俺の経験上、あの2人無しでこのミステリアスな空間を脱出することは不可能だからだ。

なんて考えてる時間もなさそうだ。

巨大ヒマワリ野郎が確実にこっちに近づいてきている。

「こりゃだめか。」

どんなに考えたところで俺1人じゃどーにもならん。

長門か古泉、朝比奈さんでもいい、誰かが間一髪助けにくるのを願うしかない。

俺自身の行動に諦めは肝心だが、俺の頼りになる友人に至っては諦める必要はない。

あいつらならどうにかしてくれるさ。

そして俺は、ヒマワリ野郎が自分の目の前に到達及び右腕なのかはわからんが、それを振り上げているのを確認すると、反射的に目を閉じた。

頼むぜ…

「うわっ」

俺の体内時計によると目を閉じてから3秒ほどであろうか。

俺は自分の叫び声とともに視界に光をとらえ、足には僅かな痛みが走った。

「いや…マジ冗談だろ」

俺は一瞬で状況を理解した。

ってか状況を理解するのにそれほど時間を要する必要はなかった。

顔と腕の至る所に、赤くなった跡と数本の直線が描かれ、足の一部も赤くなっていて、改めてみると視界にとらえたものは、数冊の本と筆記用具、sentとかadjustmentとかいう英語の単語だった。

そろそろバカでも気付いているだろう。

きつと谷口…いや、シャミセンや妹だって気付くはずさ。気付いて

ないやつがいるとしたら、それはきつとさっきまでの俺くらいだ。

現時刻、5時47分。

「夢かよ」

そう、恥ずかしいことに俺は机に着くとほぼ同時に俺は夢の中へ旅立っちまったようだ。

世界の危機に寝ちまうような俺は戦隊ヒーローにはなれんな。

戦隊ヒーローのなんとかレンジャーなら、深夜2時だろうと何時だろうとしつかりとやるべき行動を起こすだろう。

まあ、もうこれじゃあもうどうにもならないというわけだが…しょうがないことはしょうがない。

「アインシュタインの長時間睡眠定理にでもかけてみるか」

俺にはアインシュタインのような頭が有るはずもないのに、意味不明なことを呟き登校までの正味一時間弱、重たい頭を上げ机に向かった。

そして、テスト当日

朝から無理に頭を動かしたせいか、足も重くいつもの早朝ハイキングコースが長く感じられる。

まあ、俺が普段それだけ勉強してないってことだ。
自業自得ってやつだな。

まあ、朝から谷口が話しかけてこなかっただけでよしとしよう。

それより問題は別にある。どうにか集中しなければ、世界滅亡だからな。

そして俺は教室に着くと、嫌でも目に入るハルヒと目を合わせないように自分の席についた。

「キョン！！あんた今日大丈夫でしょうね。」

たぶんな。

「多分じゃないわよ多分じゃ。SOS団の名誉が懸かっているのよ。もし悪い結果だったら私刑よ。」

ああわかったわかった。

SOS団の名誉なんかしつたこつちやない。

俺は世界の平和の方が大事だ。

てか一応つつこんでおくが、もうこの団に名誉もへったくれもあつたもんじゃないだろ。

「なら今は静かに勉強させてくれ。」

そついうとハルヒはわかったわよ。といった顔をして腕組みをして俺から視線をそらした。

そして、それから約5時間後。

世界の平和は各教科の教師の手に委ねられた。

ハルヒが笑っているのか怒っているのかわからないような表情で、いろいろ叫んでいるが、俺は一言こついうしかない。

「頼むぜ」

そしてそして、更に一週間後…

俺はハルヒの視線を背中に感じながら各教科の教諭から時限爆弾という名の自分の答案用紙を受け取っていた。

結果は放課後部室で見せあうということになっている。

点数的に、50番以内というのは無理であって、よくて70番以内である。

まあ、俺の目から見たら、最初の親の機嫌をとるという目的は達成されたには違いない。

しかし、ハルヒの目からみたらどう思うやら。

俺にはさっぱりわからんが、どうにか許してもらっしかなさそうな予感だ。

放課後を迎え俺は部室までの廊下をいろいろ考えながら歩いていた。ついに運命の時間がやってきたわけであるが、教室で最後となるかもしれない会話が、谷口の自慢話をちくわ耳で受け流しただけだということは少し虚しい。

そして部室の前に辿り着いた俺は、いつものようにドアをノックした。

「はぁーい」

朝比奈さんのキュートな声が普段通り耳元に届く…

「遅いわよ、キヨン!!」

と同時にハルヒの声も耳に響いた。

今日ばかりは、ハルヒの声も、悪魔の囁きにしか聞こえないね。
俺が着いたときには既に、長門、古泉と、みんな集合していて、俺を待っていたようだ。

長門はいつものように無表情で、古泉もいつものようにスマイルを浮かべていたが、少しずつではあるが、二方とも表情が険しく見えた気がした。

「じゃ、みんな答案用紙を出しなさい。せーので一斉に私に差し出すのよ。ほら、有希もみくるちゃんも早く椅子に座って!!」

遂にハルヒからこの一言が発せられた。

てかハルヒに差し出すなら、一斉に差し出す必要はないんじゃないか？

などと突っ込む暇はない。

ハルヒを納得させれる言い訳を考えるだけで今は精一杯である。

「じゃ、覚悟はいい？…せーのっ！！」

俺は目をつぶり、力みまくった両腕をハルヒに向かって突き出した。
ハルヒの表情はもちろん、誰1人の表情も把握できない。

きつと朝比奈さん以外はなにかしらいつもと違う表情を浮かべてるに違いない。「有希と古泉くんは予想通りね、お疲れ様！！！」

ハルヒの溢れんばかりの笑顔が想像される。

きつと学年トップクラスの成績に大層満足していることだろう。
古泉もなぜか深々と謝辞をあげている。

「次は…みくるちゃん！！」

「は、ははははい…」

まあ薄々気付いてはいたが、俺は最後まで、俺は最後まで、俺は最後まで結果のでている結末を最後まで引っ張られて、ここまで緊張するのはこれが初めてだな。
いや、最後になるかもしれん。

朝比奈さんはなにも知らないにも関わらず、今頃ハルヒの視線に耐えれず震えていることだろう。

「あたし、みくるちゃんをみくびっていたわ…みくるちゃんがこんなにできる子だったなんで。みくるちゃんにしては大金星よ！！さすがSOS団団員だけのことはあるわね。」

あの朝比奈さんならハルヒの満足する結果は当然だろう。
俺も驚くほどだったからな

「あ、ありがとうございます。」

朝比奈さんボイスは何度聴いても癒されるね。
ウォークマンにでも入れて持ち運びたいくらいだ。

「最後はキョン、あんたの番よ。顔をあげなさい。」

俺は顔をあげ、視界を取り戻した。
捉えたのはもちろんハルヒである。

ハルヒの顔が恐ろしいね。

今ならハルヒに対して異常行動を起こしてしまいそうだ。

「キョン……」

血の気が引け、緊張が一気に私の体温を奪っていく。

ハルヒの表情もハツキリ把握できないくらい、俺はハルヒの言葉に耳を傾けていた。

そしてハルヒは口を開いた。

「うーん…勉強の割にはあんまり結果が奮わないわね…。」

ハルヒの口から告げられたのはなんとも判断しがたい微妙なものだった。

「ハルヒ、長門、古泉、朝比奈さんほどじゃないが、俺だって一生懸命やったんだ。」

口から自然とこの言葉がこぼれ落ちた。

俺だって必死だったんだ。

ハルヒの耳にどう届いたかはわからない。

ただ、ハルヒの口が再び開いた。

「キョン、人間の脳はね、全体的にみても頭のいい人と悪い人の脳の大きさの差は殆どないの。だからあんたの発言はただの言い訳でしかないわ。」

もうこりやあなにを言おうと無駄だ。
グッバイ地球。

「でも…」

「へ？」

「あ、あんたにしてはそこそこ頑張りが見えるから、今回は次の喫茶店で全員分、奢りで許してあげるわ。」

奢りはいつものことだろ。

なんて突っ込むところじゃねえ、なんとか世界平和が守られたようだ。

その言葉と同時に、俺は安堵のため息をついた。

そして次の日

何事もなかったのようにはいつもの平和が訪れていた。

今は古泉とオセロで暇つぶしを営んでいる最中である。

そしたら古泉がこんなことを言い出した。

「彼女、涼宮さんに聞いてみたんですよ」

「なにをだ」

「あなたのあの成績を、なぜあんな簡単に許したかをです。」

古泉はいつも通りの笑顔で話し始めた。

そんな危険なことをいちいちやらかすな。

そして古泉、俺にはただの嫌味にしか聴こえん。

古泉は解説を続けた。

「そしたら涼宮さんは一言だけ、こう答えたのです。」

「テスト中に頑張っている様子が伺えたから。とね。」

ハルヒの予想外の発言に俺は一瞬戸惑った。

「おっと、涼宮さんにはこのことは内緒ですよ。口止めされていますから。しかし、いったいどんな形相でテストを受けてらしたんで

すか？」

古泉はふざけ半分なのか、笑いながら俺に聞いてくる。
なんて嫌らしい奴なんだ。

まず基をたどればお前ら機関とやらが閉鎖空間を解消できなかった
ことに問題があるということ覚えていてほしいね。

しかし、ハルヒがそうまで思いつてことは、相当なもんだったんだ
な、俺も。
前夜は勉強せずに寝たなんてバレた宵には、時限爆弾が再び動きだ
しそうだ。

でも、もうそんなことはどうでもいい、俺は無事に今の世界消滅の
危機を、喫茶店のお代だけで乗り切ったんだからな。

ハルヒが許してくれた理由なんていらない、今のそれだけで十分だ
ろ？

オセロ盤を黒で埋め尽くしながら俺は古泉の問に対してこう答えた。

「お前の分は奢らん」

あとがき

あとがき

このスペシャルコースは、僕が涼宮ハルヒシリーズをかく上で、最初の物語となりました。

最初は長編物にしようと思ったのですが、パツと思いついたのがこれだったため、短編になってしまいました。

タイトルの「スペシャルコース」の意味ですが、これはそれぞれで解釈されてください。

恐らくみなさん同じような解釈になることと思います。

今回は長編物を書きますので、どうぞこれからも「涼宮ハルヒの別冊」をよろしく願います。

ではまた次回作で。

涼宮ハルヒの疑惑

涼宮ハルヒの疑惑

プロローグ

涼宮ハルヒと愉快的仲間たち、の仲間たちの部分に仲間入りしてしまった俺は、今まで以上に暑くて無駄に忙しい夏と格闘する日々が続いている。

朝の強制ハイキングで汗を流し、体育では運動部でもないのに太陽が照りつける中グラウンドに駆り出され、放課後は文芸部室でひたすら暇を過ごすという、なんの目的もない学校生活を送っているわけだが…

本日、ついに俺たちの高校である県立北高校が終業式を迎えた。

最も暑い月とされる8月に、長期休暇をとるという日本の方針は俺としてはかなりありがたい。運動部からしたら、地獄のような練習時間が増え、夏休みを恨むような奴がいるのかもしれないが、俺には関係ない。

しかしながら、我がSOS団団長である涼宮ハルヒには終業式も夏休みもへったくれもありはしないわけで、運動部どころか公認の同好会ですらないのに、休みに入るにも関わらず明日から毎日部室に通うよう俺たち団員は通告をうけていた。

もちろん、拒否権などありはしない。

終業式が始まり、校長の長ったらしい熱演を眠りかぶりながら聴いたあと、俺たちは教室へ戻った。

ハルヒの顔は休みに入ったところでほぼ毎日見るので、長期休暇中惜しむ必要も、休暇後懐かしく思う必要もまったくもって皆無というわけである。

谷口や国木田辺りとは、またな、ああ、くらいの別れで十分である。

会わなかったところで俺の心にダメージをおわせるものがない。

それに、もしかしたら一度くらいハルヒに、アイツら、として呼び出されるやもわからない。

そうだ、鶴屋さんにはしっかり挨拶をしておこう。

約1ヶ月間あえないからというわけではなく、ハルヒのワガママにこれからも付き合ってあげてくださいという挨拶だ。

ハルヒのワガママに何のためらいもなく満面の笑みで了承してくれるのは世界中を探しても彼女くらいだろう。

そして、一時がたち担任の岡部教諭がやってきた。誰も守りもしない夏休みの諸注意を熱血的に喋り終わったあと、またあおう!!とかいって一学期終了の号令がかけられた。

「谷口、国木田またな」

「おう」

「また」

マニュアル通り挨拶をし、俺は鶴屋さんのもとへ向かった。
朝比奈さんもいるわけで、一石二鳥ってやつだ。

ハルヒはというと、俺が例の2人に挨拶を交わしている数秒の間に
教室から消失していた。

ちなみに、今日は明日からに備えてSOS団は休養日となっている。
恐らく急ぎの用もない、のにチーターのように走り去るのにはなにかしら意味があるのだろうか。
まあ、その意味を探るなんて無駄なことをする気はない。

そして俺は、鶴屋さんアンド朝比奈さんを求め、彼女たちの教室へ
向かった。

廊下には俺が向かう方向とは正反対方向に雪崩のように流れ込んでくる北高生二学年の方々が大量にいたため、俺は渋々遠回りとなるルートをとどって彼女たちの教室を目指した。

逆走でもして、上級生に嫌なイメージを持たれるのは俺としても避けたいからな。

涼宮ハルヒとつるんでるだけで、二流有名人の地位を獲得した俺

であるが、一流にまで成り上がる気はそうそうあるわけではない。

そうこうやってるうちに、俺は目的地の前までやってきた。

上級生の教室に、単身入っていくのは少々つらい。ましてやたちの悪い輩に絡まれてもしたら元も子もない。

が、そこまで憶することもなかったようで、ドアのガラスから見えるのは俺が接触を試みようとしている2人だけであった。

鶴屋さんは綺麗なロングヘアーを揺らしながら、はにかみながら座っている朝比奈さんにひたすらなにかを話し続けているようだ。

一流の可愛さを持つあの2人が揃うところもいい絵ができるのかと関心していると、ハルヒと朝比奈さんも黙っていればなかなかいい絵が出来そうだと妄想ルートに入ってしまったので、妄想が拡大しないうちに俺は2人のいる教室のドアを開いた

「失礼します」

突然ドアを開いたせいか、朝比奈さんはビクつく仕草をみせた。

「き、キョンくん？こんにちは。どうしたんですか？」

その小動物のような行動がなんとも可愛らしい。

一方、朝比奈さんの挨拶に返事を返す間もなく鶴屋さんは俺を見るなり超スピードで駆け寄ってきた。

「おおー、キョンくんじゃないかあ。わざわざあたしたちの教室まで来るなんてめがっさめっずらしいねえ。みくるになんか用かい？でも、ハルにゃんが居ないところを見ると、ハルにゃんに知られたくない用事でもあるのかなっ？ってかつ、あたしがいないほうが良かったかなっ。」

鶴屋さんはそっかしいほどのスピードで、俺の経緯を想像で造り上げた。

「いえ、違います。今回は鶴屋さん、あなたに用…というか挨拶をしたくて。」

鶴屋さんは一瞬驚いたような表情を作ったかのようにみえたが、いつの間にか、いつものハイテンション時の表情に顔を戻していた。

「えっ、あたしに用かいっ？じゃなくて挨拶かあ。挨拶ならさっきやったさあ。やっぱりキョンくんも面白い人だね。」

いや、あなたをみてるほうが十分面白い、というか楽しくなりますよ。

てか、やっぱりってなんですか。

俺もハルヒたちと一緒に部類に入れられていると思うと少し自重してしまうね。

「で、挨拶ってなんだい。何かあたしに畏まって挨拶するようなことあったっけか?」

「いえ、明日から夏休みですよね。」

「そのくらいみくてもわかってるよ。」

鶴屋さんは俺が次の言葉を発する前に返答してきた。
さすがに俺でもそのくらいわかってる。

突然名前を出された朝比奈さんが横の方でビクツとまたまた反応したのを確認すると、顔が緩まないうちに俺は話を続けた。

「そこでなんです、夏休みとなるとハルヒが騒ぎ出すのはもう目に見えてますよね?そうになると、鶴屋さんに迷惑になったりする可能性があるので早めのお願いと謝罪をしとこうかと。」

すると鶴屋さんは話が終わったと同時に声を上げて笑い出した。

「キョンくんもしっかりしてるねー。いいお父さんになれるよっ」

笑いながら言われても…

てか鶴屋さん、あなたの方がいいお嫁さんになれますよ、多分。もちろん、朝比奈さんも。

朝比奈さんに流し目を送ったが、気付いてくれなかったようだ。

すると鶴屋さんは言葉を続けた。

「でもねえ少年。その推理はちろんと間違ってるよ。」

探偵ですか。

「そこはツッコんじやいけないさあ。でだけどさ、さっきキョンくんはあたしに迷惑かけるっていったよね。でも、あたしはハルにやんたちが来たって全く迷惑じゃないさあ。むしろ大喜び、お祭り騒ぎだねえそりゃあ。」

鶴屋さんのその言葉に感謝するより先に、ハルヒを歓迎する人物がいたことに驚きだね。

「そうなんですか。本当助かります。」

「いってことさあ。あたしはハルにやんたちみんなをみてるだけで幸せになれるから、どんっどんあたしに構っちゃっておくれよ。それに…」

鶴屋さんは人差し指を垂直に真っ直ぐ突き立て、朝比奈さんを指差した。

「ふえっ？あたし、どうかしましたか。」

目を丸くしながら自分のことを人に問うという意味不明な質問をする朝比奈さんは、鶴屋さんの人差し指を数秒みたと、俺に疑問の視線を送ってきた。

まあ、俺をみられてもわかるはずないんだがな。

すると鶴屋さんは人差し指をしまい、俺のほうに向き直った。

「みくるはさあ、あたしがみてないと心配で心配でたまらないからねっ。まあ、もっちゃんキョんくんがいるから大丈夫だとは思っけどね。でも、みくる可愛いからキョんくんがなにかやらかさないと限らないし。」

鶴屋さんはまたまた大声で笑い出した。

冗談だよ冗談ー、はっはっはーなどといった具合で教室には笑い声

だけが響き渡っている。

何故かは知らないが、朝比奈さんまで微笑している。
今、あなたは笑うべき所じゃないでしょう。

「まあ少年、みくるとハルにゃんのこと、これからも頼むよん。」

「あ、はい。では、鶴屋さん失礼します。朝比奈さんはまた明日。」

「キヨンくんまたねー。」

「あ、はい。また明日。」

俺は軽く会釈をしたあと、教室をあとにした。

この2人からお別れの挨拶を同時に受けるなど、彼女たちのファンである一般生徒からしたら、殺害ものであるう。
なんて俺は幸せな日常を手に入れちゃったんだ。

つてゆか、よく考えるとお願いしにいったのをお願いされてるじゃないか。

俺はさっきまでいた上級生の大群がいないのを確認すると、早くも静まり返った廊下を一人出歩きだした。

終業式が終わったばかりなのに、野球部がもう練習を開始している。

俺にとって今までとは違うであろうSSOS団での夏休みが始まった。

第一章

第一章

夏休み、といえは夏祭りをはじめとして花火大会、海水浴、その他自分の趣味に没頭するにはとっておきの時間であろう。

また、暇を極める人にとっても宿題を片付けてしまえば最適な環境である。

しかし、そのどちらでもないのが正真正銘、この俺だ。

趣味に没頭するわけでもなければ暇を極めるとも言い難い、なのに宿題すら終わらないという未来が夏休み前半から俺には見えている。

恐らく現実のものとなるに決まっている。

というわけで俺は、夏休み5日目を迎えている。

今現在なにをしているかというところ、この暑い中自転車をはたすら漕ぎ続けている。夏休み初日以降、団長命令により暇人なら絶対寝ているであろう朝9時に、訳もなく部室に毎日集合をかけられている。

5日がたった今日でさえ、どうせなにもせず1日が過ぎることはもう解りきっていた。

そして、普段同様にいつもより暑い中ハイキングコースをクリアし、俺は当然のように部室へ向かい、部室のドアを叩くといったものの可愛

らしい声が俺の耳に届けられた。

「どうぞー」

その合図と同時に俺はドアを開くと、そこにはまだ団長の姿はなく、いつも通りメイド姿の朝比奈さんと、いつも通りパイプイスに座って読書をする長門と、いつも通りボードゲームをセッティングして待っている古泉が笑顔でこっちをみていた。

朝比奈さんは、お茶入れますねと言だけ発し、手慣れたてつきでお茶を入れ始め、長門はというと俺が入ると同時に一瞬だけ俺のほうをみたようだったが、もう本業に戻っている。ついでに、古泉は俺を待ち望んでいたのだろう。コマを握ったり並べたりして、いつものスマイルで俺に相手をするよう促している。いつから俺は古泉のお守りを任されたんだ。

こんな毎日を通ぐすぐらいなら、家で宿題を終わらせとくほうが十分効果的だと思つづくと思うね。

まあ実際にそんな状況に陥ったとして、宿題をするかと問われると、まったくもって皆無であるわけだが。

そんなこんなで、結局いつものように古泉と永遠ボードゲームを営むことになった。

「お茶入りました。」

「ありがとうございます。朝比奈さんもどうですか？」

一瞬古泉の表情がやや強張ったのは気のせいだろう。

「えっ？あたしはみてるだけでいいですよ、古泉くんにも悪いですし。」

古泉の表情を再度確認しようとしたところで、俺はそれに歯止めをかけた。

「朝比奈さん、珍しくハルヒがまだですね。」

「そうですね…いつもならもう来てるころなのに…風邪でもひいたんでしょうか」

「いえ、それはまずあり得ないでしょう。涼宮さんは責任感の強いお方です。連絡も入れず欠席をするとは考え難いですね。」

そこまで真剣な解説をお前に求めた覚えはねえでも、確かに奇妙だ。

もう集合時間から数分が経過しているにも関わらず、時間には厳しいハルヒが連絡一本も入れないまま遅刻するという思考には、今までのハルヒを見ていてもたどり着かないのは明白である。

「大丈夫ですよ朝比奈さん。たとえ交通事故にあったとしてもハルヒのことだ、車のほうを蹴散らしてここにやってくると思いますよ。」

とりあえず朝比奈さんを安心させるために、ここは適当な理由をたておくこととした。

「そうですね。」

朝比奈さんはニコリと天使のような笑顔をみせると、パイプイスを持ち出して自分も腰掛けた。

それからどれほど時間がたっただろうか、いや、言うほど時間はまだ経ってはいない。

しかしハルヒがこの場に居合わせないとなると話は全く別で、一分間が数十分のように感じる、ハルヒを待つだけの時間が午前中は続いた。

集合から1時間余りが経過し、さすがにおかしいと感じてきた俺を含むSOS団団員一同は、誰かこのことについて喋り出さないかと、お互いを探りあうような目を送りあっていたので、俺は先陣をきって口を開いた。

「長門、何か知らないか？」

「知らない。」

俺の発言を皮切りとし、古泉は溜めていた鬱憤を晴らすかのように続けて口を開いた。

「長門さん、確認ですが本当に何も知らないんですか？」

「知らない。」

何度確認したって一緒だ。

古泉にはともかく長門が俺に嘘を言うはずがない、という根拠があるわけではないがその自信はある。

「朝比奈さんはどうですか？」

古泉は朝比奈さんにも一応話を振ったあと、わからないという返答を待ち望んでいたかのように返答直後に1人で淡々と語り始めた。
「今から我々で手分けして涼宮さんを捜しましょう。僕を始めとして、長門さん、朝比奈も何も関係ないとなると、これは本当に事故やそれに該当する障害に巻き込まれた可能性があります。」

ちょっとまで、いくら何でも深追いしすぎじゃないか。

確かにこんなことは今までなかった、しかし、ハルヒにだって急用というものが僅かな可能性ながら存在するはずだ。

「まだ連絡もしてないのになぜそんなことが言える」

「連絡なら先ほど。圏外で繋がりませんでしたけど。」

古泉はいつもの肩を窄める仕草をみせた。

「というか古泉、お前はいつの間にハルヒに連絡を入れたんだ。」

「おや、あなたが上の空で空を見上げてらっしゃる時にしましたよ。気付きませんでした?」

ああ、気付かなかったね。

「でー、どうするんだ?」

「もし我々が涼宮さんを探しにいつている間に彼女が戻ってきては元も子ありません。ですので1人…朝比奈さんはここに残り、あ

とのあなたと長門さん、僕の3人は一時間程各場所を探したあと、ここに再び集合するということにしましょう。」

「ええっ、あたしだけここに残るんですかぁ？」

朝比奈さんは久しぶりに口を開いた。

確かに、校舎内に生徒が少ない夏休みに、朝比奈さんを1人で置いておくのは少しだけない。

来賓者に混じって、朝比奈さん狙いの変態共が紛れ込んでいないとは言いい切れない。

ハルヒがもし男ならば必ず俺たちがいない間に朝比奈さんを誘拐していくことだろう。

「古泉、探すのは俺とお前だ。学校がある日ならともかく、今は夏休み中だ。朝比奈さんを1人しておくのは少々危ない。長門、お前も朝比奈さんと一緒にここで待っていてくれるか？」

「わかった。待つ。」

朝比奈さんが微かに不安な顔をしたのは、長門と二人きりという空気に耐えられる自信がないからであろう。

ただ、知らない男に襲われでもするよりはマシだ。

長門なら誰が来たとしても一刀両断、返り討ちにしてくれるであろう。

「わかりました。では朝比奈さん、長門さん、もし涼宮さんが来たり連絡があつた場合、僕たちにすぐ知らせてください。」

「わ、わかりましたあ。気をつけてください。」

朝比奈さんの言葉を受け取り、俺と古泉は部室を出た。

古泉と俺はハルヒの行きそうな場所を一通り別々に探すこととし、1時間後に校門の前に集合することになった。

「ではまた後ほど。」

いつものスマイルを崩さないまま、古泉は俺に背を向け歩き出した。

古泉がいつもの表情のままのときは非現実的な危険が迫っていると
は考え難い、また長門も言ったとおりさほど心配することはないだ
ろう。

しかしこの違和感なんなんだ。ハルヒがいない以外になにかいや
な予感がする、いや、いやなことが起きてしまう気がしてならない。
なんて俺が考えたところで一切皆無、無駄である。こんな夏休みの

時間を最も有効に使うには、ハルヒを見つけることが今現在最低限必要な答えであるのは間違いない。

「どこにすることやら」

一言だけ呟いて俺はハルヒ探索へ歩き出した。それから数十分が経過したところ俺はいつもの喫茶店、北口前、都内探索で通ったルートなどハルヒの行ってもおかしくない場所を探し回ったわけだが、予測不能なハルヒの移動範囲はやっぱりわかるわけがなく、それから時間も時間が刻々と刻まれていった。

歩いているだけで汗が染み出てくるのが少しばかり嫌々しさを齎してくる。

まあそんなこんなで結局なんの収穫もないまま、汗に濡れた制服から湧き出るニオイだけを手土産に校門の前に帰還した。

数分後には肩をすばめた古泉も帰還し、俺たちは渋谷部室へ戻ることとなった。

「あつ、キョンくん古泉くんお帰りなさい。涼宮さんは？」

「見つかりませんでした。でも多分大丈夫ですよ。ハルヒはたとえ銃で相手が恐喝してきたとしても逆に急所に一撃を入れて逃げられるでしょうから」

ハルヒなら本当にやりかねん。「ですが、やはり心配です。いくら

涼宮さんでも数人グループによる誘拐にでもあわれていたら手も足もできませんからね。これはもしかしたら犯罪が絡んだ事件かもしれません。」

お前の口調じゃあマジなのか冗談なのか判断し辛いからもっとトーンをきかせてほしいね。

「冗談なんかではありません。現にまだ涼宮さんとは連絡もとれずじまいなわけですし。」

まあ連絡がとれないのは、おかしいかおかしくないと聞かれば確におかしい。

しかし誰にだって連絡がとれないこと、訳あって携帯に手をかける時間がないことがあるはずだ。

もしかしたら、病気の祖父の容態が急に悪化して親と共に病院にいったのはいいが、SOS団の用事を思い出して俺たちに連絡を入れようとしたが病院では使用禁止だったとかかもしれないぞ。

「とりあえず今日はもう解散しよう。明日いつも通りまた部室に集合して、ハルヒが来たら理由解明、ハルヒが来なかったら探索でいいよな。」

「それがいいですね。もしかしたら次は我々が狙われてるとも限りません。」

まあうじうじ考えたところでどうにもならない。ってことで団員一同は了承の返事を返しその場を後にした。

ハルヒが来なかった次の日、俺はいつものように部室へ向かった。

これでハルヒが部室に来てないとなるとそろそろヤバい雰囲気になってくるわけで、俺的にはハルヒが来ていてほしくないけど来ていて欲しかった。

自分でも嫌なことに、気にしたくもない奴を気にしてしまって、集合より30分も早く部室に着いてしまう勢いで家を出たことは胸の内にとっておくでしょう。

部室に辿り着き、いつものようにドアをノックすると、ハルヒどころかまだ朝比奈さんさえいなかったようで、なんの返答もなく数十秒が経過したため俺はドアノブを回した。

案の定、部屋の中には誰もいなかった…というシナリオになるはずだったが、この後俺は予想外の展開に一瞬意識を飛ばしかけることとなった。

「こんにちは、キョンくん。久しぶりですね。」

そこにいたのは朝比奈さんであって、朝比奈さんではなかった、まあ、簡単にいうと大人版朝比奈さんだった。

一般人なら失神するであろう状況が目のあるわけであるが、そんな理性はとうの昔にぶっ飛んじまった俺からすれば偶にある日常

であつた。

「現代の朝比奈さんとは昨日あいましたが…朝比奈さんはどこへ
んから来たんですか？そして今回もまたなにか問題が発生したとか
いうんじゃないやありませんよね？」

「あ、キョンくんからすれば毎日あたしとは会ってますもんね。あ、
あたしとっていうのはあたしじゃなくて現代のあたしって意味です
よ。」

いつてることはあやふやですが、言いたいことはわかりますよ。

「で、なんですか？」「あつ…そうそう、キョンくん…」

朝比奈さんは少し考えるような数秒の沈黙をつくったあと、今の朝
比奈さんとは違い、決意したようなハキハキした声で喋りだした。

「殆ど禁則にかかつていて上手く説明できないけど、昨日涼宮さん
が部活に来なかったのは彼女のせいじゃないの」

「やっぱり昨日、未来人に関係するような問題がハルヒにあったん
ですか」

「いえ、そんな訳ではありません。問題なのは涼宮さんじゃなくて、そつ…キヨンくんなんです。」

その言葉を聞いたとき、少しばかり胸騒ぎがした。

「理由は禁則にかかっていて言えません…でも、キヨンくんには1つだけ覚えていてほしいの。」

朝比奈さんは一息おいた後、一気に言葉を並べた。「理由は言えないけど、これからキヨンくんにはみんなと記憶の相違が生まれる。そのときキヨンくんを含む私たちSOS団団員にとって、真実が真実じゃなくなると思うの。でも、キヨンくんには決して疑うことをしないでほしい。キヨンくんにはツライことだと思うけど…」

朝比奈さんはうつむき加減に顔を垂らした。

朝比奈さんは自分の役目を全う、伝えたつもりでいるだろうがなにがなんだかさっぱりわからん。

「現代人の俺じゃあ今はサッパリですが、近い未来に俺はなにかしらのモーションを起こさざるを得ないときがくるってわけですか？」

「それは…禁則で…私が言えるのはここまで…でも、疑うことをしない、それだけは覚えていてください。」

殺人的な上目遣いでみてくる朝比奈さんから俺は視線を時計のほうへ移した。

「わかりました。ベルリンの壁が崩壊した年を忘れたとしても、朝比奈さんの今の言葉は死んでも覚えときますよ。」

すると朝比奈さんも俺に便乗したのかはわからないが時計をちらりとみると、ドアに近付いてドアノブを回した。

「ありがとうございます。もうすぐ涼宮さんと現代のあたしがここにきます。」

「ハルヒは無事なんですか。」

「あれ？涼宮さんはなにもないって言わなかったっけ。」

言ってます。それらしいことは言ったかもしれませんが

すると朝比奈さんは軽く頭を叩くような仕草をして、小さく言葉を呟いた。

「まあ、あたしはもう行きます。もしかしたら近いうちにまた会うことになるかもしれませんね。あっ、あと現代のわたしにわたしが来たことは内緒よ。」

また会うという言葉が少しばかり気になったものの、もう時間の余地はないようだ。

「じゃまたね、キョンくん」

いつもの魅力200%の優しい表情に戻った朝比奈さんはそういうとドアを押し、部室から消えていった。

「こりゃあどうしたもんかね」

よく考えると大人版朝比奈さんももつと時間のとれるときに来てほしいもんだ。

もしかしてあの時間じゃないとお、未来的にマズいことになったりとかがあるのだろうか、と数十秒考え込んでいると、大人版朝比奈さんの予言というか…記憶通り走ってくるような足音と、救急車のドップラー効果みたいに叫ぶ、いつもの朝比奈ボイスが聞こえてきた。

よくみるともう集合15分前になっており、ハルヒと朝比奈さんはいつも俺の10倍近く早く来ているのかと無駄な関心を抱いていると、ノックもなく大音量でドアが開かれた。

「さあみくるちゃん、みんながくる前にさっさと着替えるのよ。つてキョン！？あんた早いじゃない。」

「ああ、今日は珍しくいつもより早く目が覚めた訳でな。千載一遇の奇跡ってやつだ。」

「あんた、千年に一度しか起きないような奇跡が早起きに使われるなんて酷なやつね。」

昨日の心配した俺の純粋な心を返してくれ

「それよりハルヒ、お前昨日はどこにいったんだ？」

「あつ、あのう、涼宮さんは…」

俺がハルヒに問うのと同じくらいに、回答主となるはずの女とは違う声の持ち主が口を開いたかと思うと、すかさず回答権を取り返すかのように回答主が声をあげた。

「ああー！！そうよ、キョン。あんたねえ、団長であるあたしを直々に呼び出しておいて自分が来ないとはどういうこと！？電話しても携帯の電源は入ってないし。」

一瞬俺は言葉を失った。

俺はハルヒに呼び出しの電話などしてはいないし、携帯の電源が入ってないのはむしろハルヒのほうであるはずだ。ましてや俺が直々にだと？

「ちょっと待て。俺はお前を呼び出した覚えはないし、携帯の電源も切った覚えはない。」

「はあ？あんなに言ってるの。あたしがあんたの声を忘れるとでも思ってるの？」

冗談じゃない、俺のドッペルゲンガーでも現れたとでも言うのか。

「待て待てハルヒ、お前は俺に電話したと言ったな。逆に、俺たちは古泉の電話からお前に電話してるんだ」

ハルヒはさらに眉をつりあげた。

「はあ？あたしはねえ、あんたから連絡あるかと思って携帯ずっと握りしめてたけど、電話なんて一本もなかったわ。それに、今日来てみたらあんたは呼んでないとか意味不明なこと言い出すし…これ以上ふざけると殺すわよ。」

こうなってしまうてはもう弁解の余地はない、というか弁解という言葉の使い方はこれで正しいのだろうか。

「ハルヒ、ちなみに俺がお前に電話したのは何時だった？」

「6時半よ6時半。あたしだから起きてたものの、休みでゆっくり寝ときたい一般高校生なら睡眠時間を邪魔されて激怒しているところよ。」「はあ？あんなに言ってるの。あたしがあんたの声を忘れるとでも思ってるの？」

冗談じゃない、俺のドッペルゲンガーでも現れたとでも言うのか。

「待て待てハルヒ、お前は俺に電話したと言ったな。逆に、俺たちは古泉の電話からお前に電話してるんだ」

ハルヒはさらに眉をつりあげた。

「はあ？あたしはねえ、あんたから連絡あるかと思つて携帯ずっと握りしめてたけど、電話なんて一本もなかったわ。それに、今日来てみたらあんたは呼んでないとか意味不明なこと言い出すし…これ以上ふざけると殺すわよ。」

こうなつてしまつてはもう弁解の余地はない、というか弁解という言葉の使い方はこれで正しいのだろうか。

「ハルヒ、ちなみに俺がお前に電話したのは何時だった？」

「6時半よ6時半。あたしだから起きてたものの、休んでゆっくり寝ときたい一般高校生なら睡眠時間を邪魔されて激怒しているところよ。」

ハルヒの機嫌はなおるところか悪化していくばかりである。

しかし、俺はバカじゃない。というと軽く誤認を呼ぶが、バカはバカでも数分前の出来事を忘れるほどバカではない。

特に現代にいる子供版朝比奈さんとは少し違った、あの透き通った大人版朝比奈ボイスだ。

忘れるやつがいたらそいつは相当頭が逝ってるやつか、朝比奈さんのあまりのスレンダーなボディに魅了されて頭の中が真っ白だったかのどちらかしが考えられん。

「すまんハルヒ、完全にそれは俺の手違いだ。多分アホな俺が寝ぼけたまま電話したわけで、完全に起床した俺は電話した記憶は全くないとしが考えられん。次の喫茶店ではたとえ俺が一時間前に一番早く来ようと全員の代金を俺が取り持つことを約束しよう」

朝比奈さんは言った、「疑うことをしないで」と。
だったらここは素直にハルヒを信じようじゃないか。

俺がハルヒを呼び出したなんてことはあり得ないわけだが、今の俺

にあり得ないなんてことはあり得ないわけで、ここは朝比奈さんの言葉を素直に信じてやりきるしかない。

「はあ？あんたふざけてんじゃないわよ。まあ、次奢ってくれるなら許すわ。ただし、今日以降こんな事があつたら一年間あたしの下僕として働いて貰うわよ、いい！！」

俺はいつだって下僕同様の扱いしか受けた記憶がないのは気のせいかな。

「ああ、わかった。本当悪かった。」

ハルヒはふんつ、と鼻息をたてて、団長席に酔っ払いの社長みたくドシンと座った。

「さあキョン！！今からみくるちゃんが着替えるから早く出て行きなさい。もし居たければいてもいいわよ。ただ、その場合は見学科百万円を部費として寄付してもらうけどね」

またハルヒは本気なのかギャグなのかよくわからん顔をしている。朝比奈さんは朝比奈さんで、「ひえー、やめ…」とかなんとか言っているが、俺が本当に百万円を所持しているとも思っているのだろうか。

まあ、うちが鶴屋家並みの金持ちならば百万円を寄付してでも観る価値のある朝比奈さんの生着替えを拝むのも悪くはないが、俺が観ている中着替える朝比奈さんが嫌がるのも目に見えているわけで、

そんなことしたら未来的にも俺と朝比奈さんの関係はいろいろされてヤバいんじゃないか。

「いや、遠慮しておく。俺が百万円を部費としてつき込むときは、SOS団を辞めたくて仕方がないときに、賄賂的な感じで金と退部を交換するときだ。」

朝比奈さんは少しだけあかくなつた頬をかわいらしく緩め、ほつとしたような顔をみせた。

「いや、許さないわキョン。あんたが辞めたくて仕方がないときには、退部料として一億円を寄付してもらつことになつてゐるから。」

いつたいつ決まつたんだ

「SOS団発足時に決まつてゐるじゃない。つてか早く出て行きなさい！！」

あー、わかつたわかつた。

朝比奈さんもハルヒがなにかし出す前に早く出てほしいというような目をしていたため、俺は部室からそそくさと抜け出した。

ついでに、どうやら俺が自発的にSOS団から脱退することは不可能らしい。廊下で待つ間、徐々に蒸し暑さをます気候を感じ取りながら空を眺めていると、蚊の飛ぶ音より小さいかと思つほど足音をたてずに長門がやってきた。

「よう、長門」

無言で答える長門。

「毎度のことだが今、朝比奈さんが着替え中だな。お前なら先に入っても大丈夫だと思うぜ」

「いい」

「そうかい。」

そうして数分が経過した後、ハルヒに怯えているのか、いつもどおりなのかよくわからないような朝比奈さんの弱々しい呼び声が聞こえたので、俺はドアを開いた。

後ろには長門が人形みたいに本を手に納めて立って、俺が入るのを待っているのは言うまでもない。

そのとき、俺の視界にはメイド服バージョン朝比奈さんが入り、朝早いとここまで新鮮なのかと朝日を見るような目で関心していると、そこから妄想できそうな雰囲気を一気に打ち砕いたのは言うまでもなくこの女である。

「あらっ、有希。いつ来たの？有希なら別に入ってきててもよかったのに」

長門はハルヒの問いに、多分マイクロ単位で頷き、いつもの無表情を崩さずにパイプイスへ向かった。

「みくるちゃん。お茶いれてくれる？」

「はぁい。」

すっかりSOS団専属となったメイド版朝比奈さんは、ハルヒの掛け声を待っていたかのように瞬時に声に反応し、3人分のお茶を用意し出した。

「あんたが早く来たのはいいけど、その代わり古泉くんがまだ来てないわね。」

時計をみながら言うハルヒだが、集合時間までまだ数分の余裕があるのは言うまでもない。

遅れたら沸騰しだしたお湯のようにブツブツ言い出して最後には爆発する、まあ俺の場合は無条件で常に叫ばれ続けるわけだが：

つと、よく考えてみると俺が早く来たことにより本日は古泉が最後である。

最後の人は奢りというルールは校外でしか効果を発動しないものの、大抵…というか9割の確率で4番目がハルヒ、最後が俺となるわけであって古泉が最後というのは少々珍しい。

まあ古泉だ。気にするだけ無駄であり、来たら来たで二流のイケメン面を得意のスマイルと共に俺に嫌と言うほど振りまいてくる。

朝比奈さんの笑顔ならいくらでも受け止めて抱きしめ尽くしてやるのにな。

「はい、お茶です」

そうしているうちに朝比奈さんはお茶をハルヒ、長門のもとへ運んだあと最後に俺のもとへ足を運ばせていた。

「ありがとうございます。…美味しいです。」

俺の返事を聞くと朝比奈さんはウサギのようなと擬人できそうな笑顔を作り、自分もパイプイスを引き出して腰掛けた。

適当という誤解をうむが、ある程度適当に謝辞を述べる俺に、毎回のごとく礼儀正しく微笑んでくれるのには脱帽である。

「あゝ、あつついわねえ。みくるちゃん、次からはお茶じゃなくて冷たいジュースにしましょう。あつ、健康を配慮してスポーツドリ

ンクでもいいわよ。みくるちゃんが好きなのでいいから買つて
！！」

俺が回想を膨らませているとハルヒが大声で文句としか聞こえない
注文をしたあと、「ふふうん」というかなんというか何故か自慢気
な顔をしてパソコンに目を流した。

「ジュースですかあ？わかりました、みなさんに聞いて、一番いい
のを買ってきます。あつ、でも…ジュースに湯飲みっておかしいで
す…よね？」

妙な所で真面目なお方である

というか、毎回ご丁寧にお茶を入れてくれるかわゆいメイドさ
んにさらに注文するとはなんてワガママなやつだ。

まあ、メイドだから当然といわれればそうなのだが、正確にはメイ
ドではないわけで…めんどいから以下略。

とにかく、ハルヒの言うことは絶対なのであるからしょうがない。

「遅いわねえ古泉くん…キヨンならともかく古泉くんが…珍しいこ
ともあるもんねえ」

まださつきから数分しか経過していないわけであるが、ハルヒによる
と、いつ時計をみたのかはわからないが集合時間を過ぎたらしい。

というか、俺を持ち出して違う誰かと比べるのはやめてほしい。というのはいいとして、確かに妙である。

昨日と同じような発言をした記憶がある気がするが、そこはスルーするとして、古泉が遅れるとは考えられない。

しかも、俺以外のメンバーが遅れるのはハルヒに続いて二日連続でだぞ。

これもやはり昨日の大人版朝比奈さんの発言となにか関係があるのだろうか。

「遅れてすいません。」

と考えたのも束の間、問題視されていた張本人がいつもの笑顔で謝辞をあげながら入ってきた。

「古泉くんにしては珍しく遅かったわね、どうかしたの？」

「ちょっと出かける寸前に急用が入りまして。連絡も入れずに遅れてきて、本当にすいませんでした。」

古泉はいつもの肩をすばめる仕草をみせた。
「ってか古泉が急用…閉鎖空間か？」

「あらそう。急用が入ったにしては早かったじゃない。もうその用事ってのはいいの？」

俺の場合だとこの時点で言い訳の余地なし、ハルヒの怒号を聞くこととなるわけだが…こうも違うと毎日の態度を大切にしないといけなかったなと改めて反省するね。
もう遅いけどな。

「はい、一応大丈夫です。まだまだ気になることが山ほどありますけどね」

ハルヒは自分が質問したにも関わらず、「ふーん」という全く興味が無いような空返事を返し、湯飲みを持ち上げて朝比奈さんにおかわりを要求している。

古泉はというと、ハルヒをみてから一瞬だけ俺に目配せをするような仕草をみせ、パイプイスを机から引き出して腰掛けた。

今を目配せととっていいのかさえわからない俺にお前の意志を汲み取るのは不可能だと気付いてほしいね。

しかし、今の様子だとやはり昨日聞いたこととなにか関係があるのかね…

まあ、そんなことはどうでもいい。

今は全員がいつも通り何事もなくこの部室に集まっているわけで、それだけで今日という今は平和なんだ。

大人版朝比奈さんがきたということは必ず厄介な既定事項をしなければいけないときがくるわけで、そのときがくるまでは別段なにも気にすることはない。

そして今日は古泉が遅れてきた以外は何事もなく、何事もなく1日を終え、長門の本を閉じる音とともに団長からの帰宅命令が下された。

俺は長門、ハルヒ、古泉の順で部室から出たのを確認すると、朝比奈さんに一礼をし、古泉のもとへと足を運んだ。

「おい、古泉。」

「なんででしょう。」

恐らく古泉も校外に出た後、俺に話しかけるはずだったであろう。もう解ったような顔をしている所からみても明白である。

「遅れたことがなんの関係があるか俺にはわからん。しかし古泉、俺になにか言うことがあるんじゃないか？」

すると古泉は一瞬濁したような表情を浮かべた。

「おや、お察しがよろしいですね。まあ正確に言えば、言うことがあるというより聞きたいことがあるというほうが表現的に正しいわ

けですが…とりあえず立ち話もなんなので家まで送ります」

廊下から校門を見下ろすと、校門には黒色のタクシーが既に用意されていた。

いつ手回しをしたんだ古泉、とつつこむべきだろうがここはスルーするでしょう。

校門を出てタクシーに乗り込んだ俺たちは、場所を告げてもないのに俺の家に向かって運転を開始したいつものタクシー運転手を気にすることもなく、古泉は本題に入った。

「今日、僕が遅れたのには理由がありまして」

それくらいわかっている

「実は集合時間の一時間前に僕は家を出ているわけですよ。なぜだかわかりますか？」

お前がそんな時間に家を出た理由なんて俺じゃなくとも、誰もわからない。そして興味もない。

「呼び出されたんですよ。集合時間の30分前に僕たちがいつも集まる喫茶店の前に。だから来るのが少し遅れたわけです」

「で？」

俺にはお前がなにを言いたいのかさっぱりわからん。

朝比奈さんならともかく、俺はお前の1日の行動になんざなーんも興味はない。

伝えたいことを分かり易く完結に述べる力を身につけてくれ。

古泉は俺の意志を汲み取ったのか、いつものスマイルを封印してタクシーの窓越しに空を見上げ、声のトーンを少し落として淡々と語り出した。

「僕を電話で呼び出した方は、紛れもなくあなただったんですよ。」

「は？」

意味がわからないし笑えない。

なんかのギャグのつもりなら胸骨圧迫並みの勢いでツッコミを入れてやるぞ。

「いえ、冗談をいうつもりはありません。事実を述べているだけです。」

「どういうことだ、詳しく説明しろ」

「動揺するのも無理はありません、僕も頭の中を整理するので手一杯でしたから。」

古泉は一瞬顔を緩めて笑顔を作り、再び真面目な顔に戻した。

だからオセロの時いつもより弱かったわけか。まあ、普段から弱いわけだが。

「僕は前日……ですから昨日の晩、正確には23時過ぎ位にあなたから連絡がありました。あなたの声、電話番号、これは間違いありません。しかし、あなたは僕に連絡どころか携帯を所持さえしていなかった、違いますか？」

違うないね。

「だとすると、ここで明らかに僕とあなたの記憶には誤差が生まれます。」

そういうと古泉は制服の胸ポケットからボールペンとなにかの紙の切れ端を取り出して、窓を机代わりに図を描き始めた。

「これ（左）が僕の記憶、そしてこつち（右）があなたの記憶です。」

古泉は互いの距離を5センチ位離れた円を2つ横に並行に並べて描いた。

「この2つは時間平面上では同時刻、さらに重ね合わせるなら、記憶も関連していると言えます。」

古泉は2つ並んだ円の真ん中に一本の直線で結んだ。

「しかしお互いの記憶は理論上同じ時間平面上且つ関連性があるはずなのですが、僕とあなたの記憶している内容は全く違います。となると時間は直線で結ばれるものの、記憶については平面ではなく立体、本当は存在するはずのない僕が存在しているということになります。」

そついうと左側の円から右下に向かって直線を一本付け加え、その先端にさらに円（古泉）をもう1つつけ加えた

「今回の場合、正しい伝達が行われるはずであつたあなたとの会話は、第三者によって妨害されてしまったため、並行線上の記憶を辿るはずだった僕は右下、つまり僕は偽りの記憶へ誘導されてしまったわけです。さらに、異変に気付いた僕の連絡の手段をも遮断した。」

古泉は並行に並ぶ円を結ぶ線にバツ印をいれ、右下に矢印を付け加え、さらに右下の矢印から右上（俺）の円に矢印を到達させる2センチ前でペンをとめた。

頂点の代わりに円に代用されている三角形のなりかけみたいな図が出来上がった。

簡単にいうとトライアングルとでも言っておこう。

「というわけです」

というわけですよ。

俺はもう数分前から何一つわかつちゃいねえ。

もっと俺の頭に優しい方法で教えてほしいもんだね。

「で、簡単にいうとどういことなんだ」

「簡単にですか…僕の予測になるのですが。よろしいですか？」

ああ、ここまでくればもうなんでも話してくれ。

「昨日、涼宮さんは部室に來られませんでした。それは今回の僕同様、何者かに阻害されたため來れなかったと考えるのが妥当です。

推理だと恐らく、涼宮さんを陥れたのは僕を陥れようとした偽のあなただと思います。」

珍しく真剣な顔で解説する古泉であつたので、今回は俺も真剣に会話を付き合つてやることにした。

「ああ、その推理は間違っていないぞ古泉。ハルヒ曰わく、電話で俺から呼び出されたらしい。」

ってかなんでいつも俺なのかね。

俺は恨みをかわれるような行動をとった覚えはないんだが…
これもハルヒのなんかと関係があるのだろうか

「いえ、涼宮さんが直接的に関係しているとは言い難いでしょう」

人の心を読むな

「で？」

俺はあえて無駄なツッコミは入れず、虎視眈々と話を進めさせた。

「現在、偽のあなたが何者のなのか、ましてや人間なのか動物なのかさえ全くの皆無です。しかし、今回謎な存在：黒幕が我々に何故近付いたのか。それについては2通りの推測をたてることが出来ます。」

「それはなんだ」

「説明しましょう。まず1つは我々SOS団を分断させようとしている、そしてもう1つはあなたをあなたを我々SOS団から退去さ

せようとしている、この2パターンが考えられます。」

古泉は身振り手振りを織り交ぜながら説明しだした。

身振り手振りをしてもでも伝えたいのなら、もっと分かり易く伝達する能力をつけてほしいものだ。

「ちょっとまって」

古泉が言葉を終えた瞬間、咄嗟に口が開いた。

古泉の話を聞き続けるだけの行為には限界があるからな、理解と大儀の面で。

「お前の推測はわからんでもない。ただ、その黒幕がそれをしてどうなる。俺にはメリットが全くわからん。」

古泉は表情をいつもの笑顔に崩した。

よく考えてみると俺の質問に答える際は基本笑顔に戻るような気がする。

本気で答えているのかわからんから真面目な話をしている時は常に真面目な顔でいてほしいね。

「それは僕にはわかりません。その黒幕の方に直線聞かないことにはとんでも。しかし、なんのメリットもなしにこのような行動を

起こしたとは考え難いでしょう。」

古泉はまたまた得意のポーズを試みせた。

なんてあやふやなんだ、まったく。

結論、その黒幕とやらは俺たちに迷惑をかけたいことに変わりはないらしいな。

「で、俺はどうすればいい」

俺は渋々ながら古泉に尋ねた

「とりあえず、会話の内容はなんでもいいのでできるだけお互い連絡をとりあい、且つできるだけ全員一緒にいることが一番の対策だと思われます。特にあなたに至っては単独で行動することはくれぐれも慎むほうがよろしいでしょう」

この歳にまでなって夏休みの単独行動を制限されるとは考えてもみなかったね。

「わかった。ただ、1つ聞きたいことがある。」

古泉はこちらに顔を傾けた。

そういえば初めて自分が主で話をする側にたった気がするな。

「お前は2つ目の推測で、俺をSOS団から退去させるためとか何とか言ったな。でも普通に考えたらおかしくないか？ハルヒならともかく一般人の俺をあの団から去らせて何になる」

古泉は少し考え込むような表情をみせ、数分が経過した後俺のほうへ向き直った。

「これも推測ですが、黒幕側の最終目的は恐らく涼宮さんです。朝倉涼子のことを覚えていますか？」

覚えているさ。忘れるわけがない。

朝倉涼子、元俺のクラスメイト及び俺を本気で殺そうとした、谷口曰わくA Aランク+の女である。

まあ、俺からしたらDランクと言ってもおかしくはない。

「それで、その朝倉涼子は2つ目の推測の典型的な例えです。長門さんが所属する情報統合思念体、その中にも長門さんとは違う、いろいろな意識を持った存在がいることはご存知でしょう？」

もちろんだとも。

俺はお前より先にそのことを知った自信があるね。

「で、朝倉がどうした」

「朝倉さんの目的は、あなたを殺して涼宮さんの出方をまつ。でしたよね？今回の場合、あなたを殺すとはいわずとも、それと同等のことが大いに考えられるのです。」

俺の頭では理解できないような話に発展しそうだな、まったく。

「要するに、お前は長門とは違った所に属する情報統合思念体が黒幕だといったいのか？」

古泉は梅干しを食べた後の口を窄めるような表情を見せ、目を細めて苦笑した。

よくわからないような表情をするのはやめてくれ、俺がへこむ。

「それは少し違います。情報統合思念体がすべてではありませんからね。世界には、我々の所属する『機関』や朝比奈さんが所属する組織、ほかにも千差万別いろいろな組織があるわけです。したがって、情報統合思念体に固執するのはいただけませんね。」

なにが言いたいのかさっぱりわからん。

「で、結局お前はなにが言いたいんだ？」

「話を戻しますと、僕が言いたいのはこうです。あの性格とアグレッシブさ、涼宮ハルヒを直接動かすのは難しいだろう。なら涼宮ハルヒを動かすことのできるあの少年ならどうだろう、とね。」

古泉は本日最高の笑顔で言い放った。

どれだけ俺に殺意を持たせたいのかね、この二枚目青少年は。

俺がハルヒを動かせる？

バカ言え。

ハルヒを動かしたのはこの団を結成した瞬間だけで、俺は永遠に動かされっぱなしだ、ある意味ではあるがな。

「ふん」

鼻息もイマイチ立たないね。

ハルヒという名前を聞くだけでハルヒのあのSOS団専用スマイルを思い出すだ始末だし、しかもそれによって俺の純粹？な心は徐々にドス黒く濁っていくようだね。

「おや、どうしたのですか。2つの推測があるとしても確率としては我々を分断させるほうが大いに高いですよ。1人よりは全員が分断するのが理想ですからね」

「理想など知らん。ってか古泉、それって俺に限ってはどちらにし

る必ず何かしらの事態が起きるってことじゃないか」

「ご名答。ただ、前者の場合は1人ではなく涼宮さん以外の方と2人、3人と言うのは考えられます。」

「勝手に考えてろ」

なんで俺は主役、ましてや目立ちキャラでもないのに毎回毎回一番に匹敵するような出番を任されなければいけない。

「おや、もう着いたようです。ではくれぐれもお気をつけて」

「お前もな」

俺は適当に心配してるような言葉を返した後、古泉の3倍はつまい嫌顔を浮かべ古泉を見送った。

聞き流しつつきいていたが俺も注意が必要だな。

恐らく、大人版朝比奈さんとも関係あるわけだし、もしかしたら長門たちの情報統合思念体と関係ある可能性もあるわけで、俺にも大いに関係あるとなると、なぜ俺が含まれているのか本当に不思議な気分になるが、入っているからにはしょうがないわけである。

とりあえず、ここは素直に気をつけるとしようじゃないか。

個人的に朝比奈さんと連絡を取り合うのも悪くはない。

ハルヒに関してはメールすらやる気にならん、というよりしても返信がくるとは考え難いであろう。

とりあえず本日は部屋にて活動限界により停止するとうしよう。

妹の侵入を阻止するため、多分かかるであろう部屋の鍵をしめるのをわすれずにな。

あ…

自転車を置いてきた

第二章

第二章

古泉の話を聞いた約十時間後の朝

俺は重たすぎる足と頭をベッドから3センチ浮かべるのに30分を要した後、渋々ながらタンスから服を引き出して着替えを始めている。

結局、あの後母親から学校まで送ってもらい自転車で家まで帰ることになったということは、古泉のせいにして、今日絞めるということとでチャラにするとしよう。

で、こんな疲れきった体を動かしたくもないという時に、わざわざ行動を起こしているかという言うまでもない、涼宮ハルヒの集合命令により夏休み最初となる都内不思議探索パトロールという名の郊外調査へ行くこととなっているからだ。我々SOS団はハルヒの絶対服従となっていて、さらにそのハルヒがそこらへんの貴族より更に面倒とあり、俺たちも困りつきりである。

しかし、こんな悩みを抱えているのも意外と俺と朝比奈さんくらいで、あとの2人は無感情と意味不明スマイルで楽しんでいるのか違うのかわからない様子を浮かべているから、それはそれで困ったものである。

全員が反抗期を迎えてもして、ハルヒに反抗したりでもすれば少しはハルヒの行動に拍車がかかるのではと期待をしてみるが、その可能性は期待度2パーセントなわけで、諦めて従うしかないわけである。

俺は服を着替え終わると、ゾンビの真似をするような勢いの無さで階段をぬめり降りた。

「しつやみしやつみしやつみし」

階段を降りて2歩進まぬうちに、音痴とヘタレ作曲の天才としか思えないような歌を歌いながら、猫を抱えた小学生である俺の妹が朝食を終えた後なのだろう、2階へと駆け上ろうとする勢いで迫ってきていた。

「あれ？キョンくん、どこいくの？朝ご飯はあ？」

「しらん」

シャミセンが嫌そうに「にゃあ」となっているのを見届けつつ俺は適当な返事を返し、玄関へ向かった。

しかし、シャミセンが来てから妹の世話をシャミセンに任せっきりで、本当助かるってもんだ。シャミセンには悪いが。

シャミセンには今度ちゃんとお礼をするとうしよう。
いつもより300円高いキャットフードを買ってきてやる。

「キョンくうくん。みくるちゃんとデートお？あたしもいい
く？」

朝比奈さんと2人きりのデートならどれほど体が軽いことだろう、
考えるだけでそいつは相当羨ましいやつだね。

「残念ながら違う。そしてお前は家でシャミセンと遊んでいる。」

すまん、シャミセン。

「あゝ、わかったあ！ハルにちゃんとデートだねえ。あたしも…」

妹を華麗にスルーし、俺は財布に金を蓄えて行きたくもない都内探
索の集合場所、北口前へ出発した。

昼飯はこの前の俺の罪により奢ることが決定されているので、さら
にテンションが下がるというものだ。

そうだ、今日は徒歩での移動だから昨日の行為はありがた迷惑とし
て今日はタクシーで送ってもらおうしよう。

古泉が拒否することはまずないだろう。

このままいくと集合15分前には着くわけで、中学校の宿泊研修などで必ずといっていいほど習う、5分前集合というルールは3倍も速く守られたわけだ。

しかし、ハルヒルールによるとたとえ5分前行動であろうと30分前行動であろうと一番最後に来た人は喫茶店代奢りという罰金が課せられるわけで、更にそれは必ず俺の役目と決まっている。

みんな俺が来る時間をわかってるのだろうか、俺が最後以外に来たことなど恐らく過去に一度もない。

いや、一度だけあったようななかったような…

まあ、今日は俺が最後に変わりはない。

しかし、長門は普通に徒歩で来ているのだろうか、長門なら瞬間移動の1つや2つはできそうな気がする。

だとしたらいくら長門でも許さんぞ。

今日長門にきいて、本当にそうだったら罰として俺も一緒に瞬間移動させてもらおうと思う。

ついでに朝比奈さんも一緒に瞬間移動させてもらおう、大層喜ばれることだろう、移動中になにも起きないならな。

そんなこんなで俺は集合場所となる北口前に到着した。

もちろん俺が最後なのは言うまでもない。

朝比奈さんは夏らしい水玉と花柄のワンピース、古泉は襟付きシャツに七分のGパン、長門は当たり前のごとく制服姿だった。

「遅いわよキョン!! 夏休み最初の都内探索なんだから、もっとやる気を見せなさい!!」

「へーへー。遅れてすいません、朝比奈さん。」

「いえ」

俺が謝るのは朝比奈さんくらいだ。
古泉には、俺より早く来たことに文句を言うくらいが丁度いいだろう。

「ごほん。では、全員揃ったところで、本日は第3回都内探索を行うわよ。」

ハルヒは軽い咳払いをし、両腕を腰へ回して前に習えの先頭のひとのようなボーリングをしたあと、自信満々な顔でそう言い放った。
そのくらいわかっている。

「で、まずどこにいくんだ？」

「今日は2人、3人の2組に分かれて行っわよ。もちろん、組み合わせはくじ引きで行っわ。一切苦情は受け付けられないから注意しなさい」

い。」

ハルヒはSOS団専用スマイルを見せた。

回数を数えるほど暇人なのか、お前は。

それに、苦情は受け付けないといっても、苦情を出すとしたら俺とお前くらいしかないだろう。

「じゃ、早速クジを作るわよ。キョン、あそこからつまようじとマジックを買ってきて。」

ハルヒは人差し指を北方向に突き出して言った。

「なんで俺がそんなことをしなきゃならんのだ。そこらへんの地面であみだくじでもやれば十分だろう。」

「あんたが最後に来たからしょうがないじゃない。」

しょうがないじゃない、じゃねえ、確実にその使い方は間違えているぞ。

「遅刻の分は今日の全員の昼飯代でチャラのはずだ。お前が自腹で昼飯代を払うというなら話は別だけどな。」

そう言うとハルヒは、まさに「にやり」という表情をみせた。

「あんたもことんバカねえ。今日の昼のはこの前あたしを呼び出した分、遅刻は次の喫茶店だったけど、それじゃああまりにも可哀想だからつまようじとマジックの買い出しで許してあげてるんじゃない。それにわざわざ反抗するとはあんたどういう神経してんの？」
お前のほうがどんな神経してんだ。
理屈のかけらもない。

店は現在地から約100メートルあるかないかの距離にあり、つまようじ、マジックを買うのにもそんなに財布にさわるほどでもない。
しかし、たった一回のクジのために60本入りのつまようじとマジックを買うアホなんて世界中探しだってこの女以外いない、多分。

まあ、いろいろ反抗しても無駄だということは俺が一番よく知っている。

これ以上反抗でもして、次回の昼飯まで俺持ちになったりでもしたら、さすがに俺の財布が悲鳴をあげる。

「く…わぁーったよ」

俺はしぶしぶながら、人ごみをウナギのようにスルスルとすり抜けながら100メートル先の店へ到達し、指令通りの2品を買って、二足歩行バージョンのナマケモノみたいな格好で、再び団員一行のもとへ帰還した。

「キョン、あたしをどれだけ待たせるの。」

団員様ならあたしじゃなくてあたしたちくらいいつたらどうなんだ。『ぐだぐだと文句ばっか言ってるんじゃないわよ。頼まれたことは俊敏に、テキパキとって中学校で習わなかった？そんなんだからアンタには彼女ができないんじゃない。顔もだけど、集まるのは遅いし言われたことは素直にできない、行動も遅い。もしかしたらSOS団の名誉にも関わるわ。』

お前は言えないだろ…とは言えないが、彼女が出来ないのには大いにお前が関わっているし、本気で作ろうとしてもお前が許さんだろう。

それにSOS団の名誉に関わるとかなんとな言ったが、我が団に賞賛するの意を示す者など最初から誰一人としていないと言っことに気付いてくれ。

もし奇跡的にいるとしたら、それは朝比奈さんの熱狂的なファン位だろう。

俺が団にいる理由も、ギリギリそれで言い訳がたつってもんだ。ついでに、長門がいるのも俺としては助かる。

他にもいろいろツツコミ所満載だが、キリがないから却下。

「そんなに言うならお前はどつなんだよ？」

しかし、一応聞いてみる。

少しでも普通の人間の感情を持っているなら、自分を持ち上げて話すなんてことは、いくらなんでもしないだろう。

「アタシはアンタに向かつて聞いたの。聞き返すんじゃないわよ！聞き返す暇があるなら自分をもっと磨きなさい。」

ハルヒは笑っているのか怒っているのかわからないような、顔とデションでそう言い放った。

まともな返答を期待したのが間違いだった。
もうなにを言ってもダメだね。

頭のネジがすべてぶっ飛んで、代わりに接着剤ですべてのパーツをくっつけてるとしか思えん。

俺はその、なんとも愛想の悪い服笑いのような顔をしたハルヒをとりあえず放置することとした。

「で、組み合わせはどうするんだ」

突然話題を変えたことに不快感を覚えたのか、ハルヒは一瞬眉をつり上げたあと、「まあいいわ」といった顔を作り上げ、再びテレビのボリウム39くらいの声で話を再開した。

「とりあえず、2人3人の2組に分かれるわよ。古泉くん、2つに印をつけてちょうだい。」

すると古泉は、ハルヒとはまた違ったわかりにくい自慢気なスマイルになった。

「そうおっしゃると思います、もう準備を済ませておきました。」
そう言った古泉はホスト寄りのファミレスのイケメンアルバイトみたいな顔をしていた。

古泉、お前はいつ、どのタイミングで俺からその2品を掏りさり、準備を済ませたんだ。

「いいわね、古泉くん。さすが我がSOS団の副団長だわ。キョン、あんたも古泉くんを見習いなさい!!」

古泉を見習うと人間的に腐れる気がするからやめておく。
但し、ハルヒを騙すスマイルだけは見習いたい。

そして、ハルヒによりくじを引くよう掛け声がかけれ俺たちは古泉、朝比奈さん、長門、俺、そしてハルヒの順にくじを引いた。

こういうくじ引きなどの際、残り物には福がある精神で最後に引くのは毎回ハルヒとなっている。

そうやって公平な抽選の結果、組み合わせは古泉と俺、ハルヒと長門と朝比奈さんという男女ペアにわかれるというなんとも言い難い結果となった。

もちろん、苦情を漏らすことは出来ないわけだが、ハルヒも眉をつ

り上げ、なんとも言えないような表情をしている。

「うーん…これじゃあただ男女でわかれただけじゃない。不思議なものも寄ってこないってものよ。」

どういう理由でそうなるのか詳しく教えてほしいね。

「だってそういうもんでしょ？男子だけ女子だけのペアって、端から見たらただの仲のいい高校生にしかみえないじゃない。でも、男子2人と女子とか、その逆とか、どう考えたってなんか怪しいと思わない？まあ、だからって組み合わせは変えないけど」

当たり前だ、お前だけ苦情を言うなんて俺が断じて許さん。

まあ、俺からみたら誰がどう組んだって普通には見えないんだけどな。

そしてハルヒは12時に再びここに集合と笑顔で号令をかけると、

「必ず不思議なものをなにか見つけてきなさいよ！」と言うと、両手に花というのか、両腕に未来人と宇宙人という確実に不思議な2人を連れ、天下統一を成し遂げた女将軍のように堂々と満面の笑みで人混みへ消えていった。

「不思議なものねえ」

俺は思わず呟いてしまった。

社会的に考えれば、俺は確実に不思議なものを持って帰ってくる。

それは当たり前で、ハルヒも一緒だ。

なにもせずに12時に再びここに集まるだけで、宇宙人や未来人やら超能力者を連れてきたことになる。

しかし、そんなことはハルヒじゃなくとも誰も信じないわけで、しかも不思議なものなど、普通にそこら辺を歩いているわけもなく、結局はただのウォーキングで終わるのである。

毎日学校の行き帰りで十分ウォーキングは楽しんでいるというのに、休日までそれをするとなると、家でゴロゴロする方を選ぶのは当たり前だと思わないか？

「どうかしましたか？」

「なんも」

古泉は楽しんでいるのかどうかわからない、いつものままのスマイルでいる。

「とりあえず、適当にどこかへ行きましょう。行き先はあなたに任せますよ。僕が決めても肯定の意見が貰えるとはあまり思えないのでね」

「不思議なものねえ」

俺は思わず呟いてしまった。

社会的に考えれば、俺は確実に不思議なものを持って帰ってくる。

それは当たり前で、ハルヒも一緒だ。

なにもせずに12時に再びここに集まるだけで、宇宙人やら未来人やら超能力者を連れてきたことになる。

しかし、そんなことはハルヒじゃなくとも誰も信じないわけで、しかも不思議なものなど、普通にそこら辺を歩いているわけもなく、結局はただのウォーキングで終わるのである。

毎日学校の行き帰りで十分ウォーキングは楽しんでいるというのに、休日までそれをするとなると、家でゴロゴロする方を選ぶのは当たり前だと思わないか？

「どうかしましたか？」

「なんも」

古泉は楽しんでいるのかどうかわからない、いつものままのスマイルでいる。

「とりあえず、適当にどこかへ行きましょう。行き先はあなたに任せますよ。僕が決めても肯定の意見が貰えるとはあまり思えないのでね」

そらそうだ。

このタイミングで閉鎖空間、またはそれに準ずる場所に連れて行かれてはたまらんからな。

なにはともあれ、古泉とペアで良かった。

ハルヒと2人ペアにでもなったら最後、12時まで時給0円でひたすらこき使われるハメになるのはもう目に見えている。

とりあえず俺と古泉は、俺の提案でハルヒに見つかからないような本通りから少し外れた脇道にあるコンビニのイトインコーナーでドリンクバーを購入しながら、12時までの時間を潰すこととした。

古泉も、「たまには、男2人でこのようなこともいいでしょう。」とか適当に相槌をうちながらももちろん賛同した。

朝比奈さんと2人が一番理想であるが、この際ハルヒ以外なら誰でもオッケーである。

ドリンクバー片手に席へ着いた俺たちは特に会話する事もなく、静寂を守っていた。

古泉が解説者気取りでいろいろと話し出すかと思っていたのだが、わりと古泉は静かであり、「今日は天気がいいですね」とか、「なかなか興味深いボードゲームを見つけたんですよ」とか至って普通の会話を二時間かけて10数回行っただけで、昨日の会話の伏線となるような会話は一切なかった。

俺も都合がいいもんでいつも話し出す奴が話さないと少し奇妙に思っ
てしまい、珍しく自分から古泉に話を振ってやろうかと考えてみたものの、やはりそれは止めることにした。

たまにはこんな平凡な休日もいい。

よく考えてみると中3までの約15年間は平凡と暇の海に浸かっていたわけであり、俺に平凡やら普通やらが訪れなくなってからまだほんの数ヶ月しかたっていない上に、既にハルヒにはこき使われてばかりである。

これがあと2年半も続くと考えると少し憂鬱だ。

しかし、俺は再び過去15年の生活に今更戻りたいとは思わない。

非常識になってよかったかと問われれば回答に至ることはできない。しかし、今の生活が悪いとは全く思わないのだ。

こんな宇宙人や未来人、超能力者、ハルヒに囲まれた生活もな。

「ボーっとされて、どうかしました？」

「いや」

時計をみると意外にももう一時間半ほどの時間が経過していたため、俺と古泉は少し急ぎ足で集合場所へと向かった。

時間ギリギリに戻ると、既に団長様御一行はガン首を揃えて俺たちの帰りを待っていて、長門はいつもの無表情、朝比奈さんはなぜか涙目、ハルヒは少し怒りの色を顔に浮かべていた。

ここ2時間でいったいなにがあったんだ、まあ、あえてふれないとしよう。

「キョン、ききなさい!!」
「なんだ」

ハルヒのことだ、どうせろくなことではない。

「あのねえ、私がわざわざみくるちゃんの水着を選んであげたのに、みくるちゃんったら試着はしたのに買わないって喚くのよ」

「だだだだだっす、涼宮さんが選んだ水着は…あの…可愛いって…うか…凄…って…うか…あの…少し…」

朝比奈さんは喋りながら、まるで目薬を4滴くらいさしたような潤みまくった目を俺に向けて、上級生に告白するときのような震えた声をもらした。

いったいどんな水着を着させられたのだろうか、少し気になる。

が、ここは朝比奈さんをフォローしなければ、朝比奈さんの中での俺の立場がなくなるわけで、それでは未来的にも現代的にもいるとまずいことになる。

「おいハルヒ」

そう言い掛けたところで、横から俺の声をかき消す勢いでハルヒのミドルボイスがとんだ。

「それはいいとしてキョン、古泉くん、何か見つけてきたでしょうね？ なにもないと言ったらキョン、殺すわよ」

フォローする必要もなかったようだ。
ってかなぜ俺だけの名指しなんだ。

「なにもなかった。で、お前はとうなんだ。」

俺がこう言う間に古泉はしれっとハルヒサイドに移動を済ませていた。

自分だけ抜け駆けとは…なんて卑怯な。

「ちゃんと真剣に探したの？どっかでサボってたんじゃないでしょうね。まあ、こっちも何もなかったけど…」

自分がなにもなかったのに俺に問うな。

そして俺たちは俺の奢りの昼食をすませた後、再び組み分けをすることとなった。

「さあ、午後からの行動の組み分けをするわよ！もちろん苦情はつけけないわ。」

そう言うハルヒはファミレスのテーブルにあるつまようじ入れからつまようじを五本と、アンケートを書くために置いてあるボール

ペンを取り出し、先ほどと同じようにつまようじ2本の先に印を付けた。

「つかさつき買ったつまようじとマジックを使えばいいだろ。」

「なんでわざわざさつき買ったやつを使わなくちゃいけないのよ。よく考えなさい、キヨン。ここに置いてあるつまようじとボールペンはタダ、でもさつき買ったつまようじとマジックにはお金がかかっているのよ！どうせなら、無償で使えるほうを使ったほうが得した気分じゃない。」

そついうとハルヒはとっておきの自信満々満面の笑みを浮かべた。

なんとなく理屈っぽく聞こえるのが苛立たしい。

そして、俺たちは再び先程とほぼ代わらぬ順番でくじを引いた結果、なんとも嬉しいことに俺は朝比奈さんと2人、見事に印付きつまようじを引き当てた。

あとの古泉、長門、ハルヒはというと、古泉は相変わらずのスマイルであるし、長門は制服を風に靡かせながら制止、ハルヒは目を細めて脳内血管が切れる寸前のような、相手を疑う目をしていた。

苦情はうけつけないと言ったのと、それに抗ってそんな目をするのはどこのどいつだ。

「キヨン、みくるちゃん、わかってると思うけどデートじゃないわ

よ。不思議探索らしからぬ行動を少しでもとつたら明日学校で一発芸やつてもらうから。もちろんみくるちゃんもよ。」

朝比奈さんは一瞬「ひいつ」という声を出して顔を歪めながら俺の後ろへ一歩後退りした。

朝比奈さん、そんなに恐がらなくても…

「ああ、わかってる。ってかハルヒ、お前も午前中は朝比奈さんの水着選びやらで普通にショッピングを楽しんでただろ。」

「ふんつ。じゃ、またあとでね。」

今更だがハルヒはやはり自己中である。

ハルヒはふてくされた中学生のような顔をみせ、俺の言葉を聞き終わる前に180度体を方向転換して、大股を広げてツカヅカと歩き去ってしまった。

「ではまた」

古泉もやれやれといった微苦笑を浮かべ、相変わらず無口な長門を後ろに置きハルヒにノコノコとついていった。
健闘を祈る。

「じゃ、俺たちも適当にぶらっと思いますか。朝比奈さん、どこか行きたいところありますか？」

俺は、古泉には到底及ばないような、まさしく微妙スマイルと自分なりにハチミツくらい甘くした声で朝比奈さんに囁きかけた。ハルヒが見ていたらどんな反応をみせるだろうか、恐ろしい。

「えっ？あつ…えーと…どこがいいでしょうか…涼宮さんに見つかったらまずいですし…」

朝比奈さんは、授業中寝ている最中に教諭から怒鳴られて起きたときのようなビクツとした反応をみせたあと、冷静を装うような対応をみせた。冷静を装いながらも表情が全く動揺を隠せてないところがなんとも可愛らしい。

妹にこのような表情を作る練習でもさせてみようか…きっと将来役にたつだろう。

「ハルヒは大丈夫ですよ。あんな目立つのが俺たちに近付いて来たら、すぐわかりますって。」

「そ、そうですね…。じゃあ…ゲームセンター行きませんか？」

「へ？」

朝比奈さんの口からまさかゲームセンターがでるとは思ってもみな

かったな。

「ダメですか…？」

「あつ、いえ、大丈夫です。行きましょうゲームセンター！朝比奈さんの提案なら拒否する必要ありません、拒否するやつがいたら俺が蹴りを入れてやりたいくらいです」

「ありがとう。」

朝比奈さんは頬を薄い紅色に染めながら上目遣い気味で再び首を傾げた。

しかし、本当にいいのだろうか。

こんな間違いなく学園一の美少女である朝比奈さんと、明らかにデイトコースの一つに数えられるであろうゲームセンターに2人きりでいくなんて…我ながらなんと贅沢で羨ましい。

まあ万が一、ハルヒに見つかつたりでもした暁には、もしかしたら世界崩壊やらで古泉の出番がくるやもわからんわけだが、ここで断ることは世界崩壊よりつらい拷問同様だ。

よって、俺は喜んでゲームセンターというあの快楽を選ぼうじゃないか。

誰だつてそうだろ？

快楽と拷問を目の前にして、拷問を選ぶ奴はドMMMMくらいなもんだ。

残念ながら俺はM要素など殆ど持ち備えてはいない。

それに、ハルヒはゲームセンターになど来やしないだろう。
もし来たら、ハルヒたちも入れてホッケーでもやれば機嫌がとれる
ってものだ。
そう信じよう。

「どうかしましたか、キョンくん。」

「あ、いえ、じゃささつと行きましようか」

「はい、いきましょ。」

可愛らしく返事をした朝比奈さんは本日最高と思われる笑顔をみせ、
ワンピースを揺らしながらちょこちょこ先頭に出て俺を先導する
ようにやや速歩き気味で歩き出した。

朝比奈さんはスキップするような勢いで人混みをどんどん突き進ん
でいく。

「着きました」

朝比奈さんがそう言って立ち止まった所は、特に大きいというわけ

でもないどこにでもありそうな小さなゲームセンターだった。

「ここですか。なんかここに特別なゲームがあるとか、なにかあるんですか。」

「いえ、別に特別なゲームがあるわけじゃないんですけど…あの…」

そついうと朝比奈さんは口ごもって上目遣いで俺をみた。
可愛い。

「どうしたんですか?」

「いえ、あの…ここにある景品が欲しくて…」

朝比奈さんは恥ずかしそうに、太ももあたりに両拳を揃えてながら
恥ずかしそうに言った。これもまた可愛い。

「そうですね。なら俺がその景品とやらを獲ってあげましょう。」

とは言ったものの俺はどちらかというと頻繁に外出するタイプでは
い。

ゲームセンターなど、SOS団に入団させられてからある意味忙し
くて行く暇もなく、行くのは中学生以来でありUFOキャッチャー

で景品をとった記憶など微塵も残ってない。

しかし、朝比奈さんの頼みとあらば何が何でもまっとう致します。

「ありがとうございます。キョンくんUFOキャッチャー得意なんですね。」

「すみません、得意ではないです。」

「それ…でなんです、これなんです」

そういつて目線を少し流しながら朝比奈さんが指差した方向には、縦、横、高さ共に普通なサイズより大きめの機械があり、その中にはピンク色をした赤い目のウサギのような本物のウサギの二倍はあるぬいぐるみが2体配置されていた。

「あれですか…朝比奈さんらしくてとっても可愛いですよ」

予想以上に難易度が高そうだったため、イマイチ文になっていない適当な言葉が口をついて出た。

「そうですか…ありがとうございます」

さっきの言葉なんかで喜んでもらえて光栄です。

朝比奈さんはニコツと微笑んだ。

古泉とは感情の入りがえらい違いだな、まったく。

そして俺と朝比奈さんは、目標のUFOキャッチャーの前まで行き、朝比奈さんには2000円を渡して両替を頼み、俺はというとUFOキャッチャーの前で入り浸る準備をしていた。

まあ、詳しくはせざるを得なかったと言う方が正しい。

ついでに、もちろん金は俺もちである。

こんな明らかにデートの状況の中、こんなにも可愛い美少女に金を出させるさつがどこにいるものか。

いるとしたら、男バージョンになったハルヒくらいだ。

「キヨンくうくん」

そんな回想を膨らませているうちに朝比奈さんが、水をすくい上げたときのような手に、両替した100円をジャラジャラと乗せて帰ってきた。

普通に小走り位のスピードで歩いているだけなのに、今にも転倒して100円を3枚残しで、あとは紛失させてしまいそうなオーラを出しているのがなんとも彼女らしい。

そんなせいで本当に朝比奈さんは未来人なのかと思うことが多々あるのは当然のことである。

「ありがとうございます、朝比奈さん。俺、頑張ります！」

あなたと俺の財布の為に。それから数十分が経過したわけだが、まあ結論から言おう。

相手は予想通りの格上で、サッカーで俺を日本と例えるならぬいぐるみはブラジルに3対2くらいで負けるレベル程度の国で、当たり前のごとく日本では勝ち目のない試合に、無理矢理勝ちを強制したような感じで幕を閉じることとなった。

簡単に言おう。

出費2400円、浪费时间35分である。

1プレイごとに「あつ」とか「おしいつ」とか言った朝比奈さんの声が無意識に徐々に大きくなっていて、それに朝比奈さん自身は気付いていないらしく、なにか小学生じみていて可愛らしかった。

一度、ビデオカメラにでも映像をおさめて本人に見せてやりたいもんだ。

どんな赤面をみせてくれるだろうか。

まあ、しないけどな。

「本当ありがとうございます、キョンくん。あたし1人じゃ絶対とれませんでした。今度なにかお礼します」

「いえいえ、全然大丈夫ですよお礼なんて。」

ハルヒの為にお金を遣うのはしゃくに障りますが、朝比奈さんの為ならオールオッケーです。

「ありがとう。」

朝比奈さんは一億円に相当するような笑顔をみせた。
本当、ハルヒとは大違いである。

「あ、今度はみんな来て、プリクラでも撮りましょう。」

本当は2人がいいですけど。

「りょーかいです。あー、今日は楽しかったなあ。」

そりゃあ良かったです。ってか今気付いたが、ぬいぐるみを持って
いると怪しまれるんじゃないか？
ちゃんと隠しておかなければ。

そして、それから集合まで適当に時間をつぶしたあと、ぬいぐるみを誰からも盗まれないような場所へ隠し、俺たちは集合場所へと戻った。

しかし意外と時間もあつたもので、俺と朝比奈さんが着いたのは集合の30分前で、これが朝の集合だったらハルヒに奢ってもらえるなどと考えながら、ハルヒを筆頭とする残りのメンバーの帰りを待つこととなった。

この真夏の時期となると1日の3分の2以上を経過したにも関わらず真昼同様の明るさを保っているため、時間感覚が少々麻痺してしまったようで、朝比奈さんと会話を数回交わしているうちに既に集合時間となる午後5時を回っていた。

朝比奈さんは疲れたのか、時頼軽い屈伸運動をしたかと思えば、「遅いですね」とか「なにかあつたのかな…」といった具合で独り言を連呼している。

しかし実際問題、朝比奈さんの言うようにおかしい。

この前もそうだったが、かなり時間に厳しいハルヒが集合に遅れるとは考え難いし、しかも一緒にいるのは長門で古泉だ。

ハルヒならともかくあの2人が駄々をこねて遅れるなんてことは地球に隕石が降ってくる確率より遥かに低い。

となるとやはり一番に頭に浮かぶのは大人版朝比奈さんである。

「朝比奈さん、最近なにかありませんでしたか。」

朝比奈さんは突然話しかけられたせい、一瞬ビクツとなって、

「え？な、なにかつてなに？」
と言った。

わかつてはいたがここにいる朝比奈さんは今回もなにも知らないよ
うだ。

大人版朝比奈さん、俺のことを考えてもう少しはこの朝比奈さん
にも情報を教えてあげててくださいよ。

と言つてもそれじゃあ駄目なんだろうな。

朝比奈さんはかなり内股になって、今にも座り込みそうな体制で心
配そつな目をして俺を見上げている。

彼女を今すぐにでも抱きしめて、大丈夫ですくらい囁いてやりた
いもんだが、今はそんなことしている場合じゃない。多分。

俺はとりあえずハルヒ、古泉と電話を入れることとし、両方12コ
ールほど鳴らしたものの電話からの返答は留守電機能以外全くの皆
無であり、そろそろ本格的にヤバいんじゃないかと思っていると、
さすがに朝比奈さんも不安になったのか、不安が言葉となってでた。

「あの…探しにいきませんか。私とキョンくん、どちらかがここに
残ってあとの1人が探しに行きましょう。」

朝比奈さんは少々声をふるわせていたものの、珍しく決意したよう
な発言をした。

朝比奈さんにしては普段の何倍も冷静で頼もしいので驚いたが、今、

この状況で別行動をとることはあまりにも危険である。

「いえ、2人で捜しましょう。別行動だとしてもしなにかあったときが大変です。もしかしたらここにハルヒたちが戻ってくるかもしれないませんが、そのときは古泉が気を利かせて電話くらい入れてくれるでしょう。」

朝比奈さんの不安そうな表情はそのままだが、ちゃんと話は理解してくれていて、周りを見回すような仕草をみせたあと、
「いきましょう」
と言って足を立て直した。

りょーかいです、朝比奈さん。

あなたには言えませんが、俺としても気になることがいろいろあるんでね。

それから正味1時間、まだまだ日は全く落ちてはいないものの、朝からの出勤ということもあってか、運動部でもない俺にとってはさすがに足腰が崩壊の一途をたどっていた。

朝比奈さんも同じくお疲れのようで、最初の頃の独り言やらなんやらが3倍程度少なくなつて、常にうつむき加減で下に目線を落としたり、俺のあとをついて歩くだけの状態となっている。

いくらハルヒたちがいないという一大事だとしても、朝比奈さんに無理をさせるわけにはいかない。

ハルヒたちも大事だが、朝比奈さん個人も大切なSOS団の一員だからな。

「朝比奈さん。今日はもう帰りましょうか。」

そういうと朝比奈さんは栗色のロングヘアーを太陽の光で輝かせながら、長門と同じようなマイクロ単位のうなずきをみせ、なにか言おうとしたが口をパクパクさせるだけで終わり、再びうつむいた表情で下を向いた。

「そんなに心配しなくてもきつと大丈夫ですよ、朝比奈さん。ハルヒや長門、古泉もいるし、あいつ等のことだ。なにが現れようとも一瞬で蹴散らして戻ってきますよ。」

そういうと朝比奈さんは少しだけ顔を持ち上げて、
「ですよね…。うん、きつとそう。大丈夫。」
と自分に言い聞かせるように何度か同じ言葉を繰り返していた。

大丈夫…か。

朝比奈さんにはそう述べたものの、正直俺は確信していた。

あの大人版朝比奈さんがこの時間に現れたあのときから何かが起きることは恐らくもう既定事項なのだ。

でなけりやわざわざ遠い未来から現代にいる朝比奈さんの上司と思われる大人版朝比奈さんが直々に出向いてくるわけがない。

だとすれば、この後俺がやるべきことはとりあえず1つだ。

「だから朝比奈さん。今日はもう帰りましょう。暗くなって俺たちまでどうにかなったら大変だ。明日になれば学校で、きつといつものうるさいハルヒの声が嫌でも部室中に響き渡りますよ。」

「そうですね…。まだなにか起きたってわけじゃないですからね。」
そして一段落を無理矢理つけた後、朝比奈さんを自宅近くまで自転車で送り届けて、笑顔で手を振ってくれる彼女にこちらも笑顔で対応し、自転車を反転させてその場を後にした。

朝比奈さんが見えなくなった所で、俺は溜め息をついた後、疲れきった体をどうにか稼働させ、再び自転車に跨ってペダルを力強く踏み直した。

どこに行くのかと問われれば、もういうまでもない。

大人版朝比奈さんに会いに行くのが最も適当だが、俺は時間歩行なんてできやしないわけで、大人版朝比奈さんに会うには彼女にとつてなにかしらの既定事項があるときだけであるから行く宛はあと1つしかない。

俺が絶対的に信用をおく我がSOS団一の無口キャラ、長門有希のものである。

長門の住んでいるマンションはここから約6キロ程と少し離れていて、今の俺にとっては後回しにしたいランキング上位にくいこむほどの、なんともやりたくない行事なわけだが、これは後回しにでき

ないランキングでもダントツ1位にくいこむため、やるしかないわけである。

「やれやれだぜ」

日も少しずつ落ちてきて涼しい風が体をすり抜けていくことだけが、今の唯一の助けである。

そうしてこぐこと小20分、涼しくなってきたこともあり予想より早く目的地までやってきた。

長門の住んでいる部屋の暗証番号は今までの経験上、既に把握済みである。

俺はいつものように番号を打つ。

「長門、俺だ。いるならちょっとあげてくれないか？」

.....

沈黙は続いた。

長門を訪ねた際、沈黙がないことなんて一度もなかったわけで、別段心配することもなく今日も普段どおり沈黙の返信と共にマンションの中への入り口が開かれるものだと思っていた。

なにかしらあった時でも長門は必ず俺たちを助けてくれた。いつもの変わらぬ無表情で。

しかし、俺は長門を頼りにしすぎていたのかもしれない。

長門は大丈夫。

古泉、朝比奈さんは普通の人間と考えて長門だけ宇宙人と思わず思いこんでいた自分がいた。

.....

「長門?...長門!」

いつもはあるはずの長門の無言の返答は無言のままであった。

「なんてこった、おい。」

独り言が口をついて出た。

夏の暑さとは裏腹に、突然絶対零度を受けたような、血の気が一気にひくような感覚を体が覚えた。

俺はとっさにハルヒ、古泉と再度連絡をいれてみたが、こちらも同様通話中となるだけで繋がらない。

俺は少しずつその場から後ずさりしていることに後々に気づいた。

ハルヒと古泉が電話してるだけならいいんだが...その可能性はシャミセンが今夜「おかえり」と出迎えてくれるくらい低いわけで、まあ簡潔にいおう、改めて実感する。

これは一大事である。

とりあえず俺は頭を整理すべく、なぜか急いで長門在住のマンションをあとにし、自宅方向に自転車を方向転換させ、暗くなりかけた空を気にしつつ足をフル稼働させて猛スピードで自転車をこぎ進めた。

暑くもないのに汗が無意味に流れ出る。

汗が出るとき無意味じゃないことがあるのかと問われればそれは返答に困るわけだが、今はそんなことどうでもいい。
超高速で自宅へ帰還した俺は、妹&シャミセンの言葉をすべて振り切り自分のベッドの上へ飛び乗った。

異様な汗がベッドに染み込む。

いつもなら快適な夜を過ごせるよう、速攻で風呂に入って汗を洗い流すわけだが、今日は例外で、そんなの気にしている暇もない。
洗濯する母親には悪いが。

しかし、どう考えたところで答えはなににも導き出されないことは既にわかっていた。

古泉ほどの解説力があればもう少しはいろいろと行動を起こせそうだが俺は古泉ではないし、そうなりたくもない。
そういうのは古泉で十分だ。

「キョンくうーん。ごはん食べないの？」

「食べん。」

動き疲れたせいか、異常なほどにお腹が減っていたものの、なぜかむしゃくしゃして食べる気にもなれなかった。

まあなにか引用して説明するなら、勉強したことなのにテスト中は緊張して答えが導き出せないときのようなむしゃくしゃだ。

こんなときは寝るのが一番である。

1度寝て、頭をリセットすることも大事なことももしれん。

そしたら、探偵もののドラマみたいに突然ピカンとくるやもしれん。超高速で自宅へ帰還した俺は、妹&シャミセンの言葉をすべて振り切り自分のベッドの上へ飛び乗った。

異様な汗がベッドに染み込む。

いつもなら快適な夜を過ごせるよう、速攻で風呂に入って汗を洗い流すわけだが、本日は例外で、そんなの気にもしていない暇もない。

洗濯する母親には悪いが。

しかし、どう考えたところで答えはなにも導き出されないことは既にわかっていた。

古泉ほどの解説力があればもう少しはいろいろと行動を起こせそうだが俺は古泉ではないし、そうなりたくもない。そうというのは古泉で十分だ。

「キョンくうーん。ごはん食べないの？」

「食べん。」

動き疲れたせいか、異常なほどにお腹が減っていたものの、なぜかむしゃくしゃして食べる気にもなれなかった。

まあなにか引用して説明するなら、勉強したことなのにテスト中は緊張して答えが導き出せないときのようなむしゃくしゃだ。

こんなときは寝るのが一番である。

1度寝て、頭をリセットすることも大事なことももしれん。
そしたら、探偵もののドラマみたいに突然ピカんとくるやもしれん。
うん、そう信じよう。

自分に言い聞かせるといふなんともアホらしい自己暗示をかけながら俺はそのまま視界を漆黒に包ませた。

これからなにが起きるとも知らずに。

朝

妹のかけ声のもと、いつものように布団を引っ張られたたき起こされた俺は、昨日汗塗れの服のままで寝たせいもあり、俺の体は臭さと冷たさに包まれていた。

そんな体を無理矢理に起こし、いつものように朝飯を食し、シャワーを高速で浴びて制服に着替えた後、俺はいつものように玄関へと足を運んだ。

今日から、2年生にとっては地獄、3年生にとっては受験までの中間調整という、それぞれ違う意味を持った課外授業が始まっていた。ちなみに1年生は課外は免除という、夏休みを満喫するには最高の設定となっている。

まあ、それはおいといていつもと同じような今日じゃないことは重々承知だが、いたって普通の朝ということもあり俺は昨日のことを忘れたかのように落ち着いている。

これで外に出たら古泉が待ち構えている。なんて展開になればこちらとしてはそれ以上に嬉しいことはない。むしろ、俺の昨日の心配を返して欲しいものだ。

「あれえ、キョンくんどこいくの？学校？」

当たり前だろ。

俺たちはハルヒがいる限り年中無休だ。

妹が朝から意味のわからないハイテンションで意味のわからない問いかけをしながらシャミセンと戯れている。

もう少し落ち着いて、朝比奈さんみたいな女の子らしい一面を磨いてほしいものだ。

そして俺は妹に無言で返答を返し、この緊張感から解放されるべく、急いで学校へとむかった。

緊張感から解放されるかどうか。なんてわかったもんじゃないが、前回のハルヒ同様、また学校に行けばいつものようにハルヒが口をアヒルのようにして待っているような気がする。

ってかそう信じたい。

夏を迎えてから毎日の嫌な日課となっている早朝ハイキングコースを、早く秋にならないかと思うが、またすぐに寒い冬が来るかと思うとそれはまた憂鬱で、そう考えると俺を含む大抵の日本人は本当に調子がいいなと思いながら完遂させた。

玄関までたどり着いたところで俺とは殆ど無縁である30代前半の女性の教諭と出会った。

茶髪でセミロングな髪をしていて、やや童顔気味であり、年のわりに意外と可愛い服を着こなしていて、わりといい顔をしている教諭であり、噂によると生徒からは授業のわかりやすさを除いて人気があるらしい。

高校生から人気がある教諭なんてのは、勉強の教え方ではなくただ単に外見や面白さだけだということがハッキリわかるね。

で、その女の教諭は2、3年生の一部の英語担当であり、さっきもいったとおり今の俺とは縁もゆかりもないわけだが、その教師と会話したおかげで俺は異変に気付くこととなる。

「おはようございます。」

俺は軽い会釈をし、教室へ向かおうとしたところその教諭の発言により俺の歩行は阻まれた。

「君、1年間？」

「そうですけど、なにか用でも」

そういうとその女の教諭は、口元を緩めてクスツと笑いながら、
「それはこっちのセリフでしょ。」
と言ってニコツと微笑んだ。

全く意味がわからん。

話しかけてきたのはそっちだろ。

俺のふてくされたような表情を汲み取ったのか、顔を真顔に戻し言葉が続けた。

「あなた、1年生なんでしょ？なんかの部活動生でもなさそうだし…まだ課外もないわよね？」

一応、恐らく学校一有名な部活動の部活動生ではあるが、部活動生ではないと言っておこう。

「課外は2年生からじゃありませんでしたっけ？あと、一応部活動には入ってますよ。文芸部室を占領して、いつも意味不明な爆弾的行動をとる、オレンジリボンを付けた涼宮ハルヒが部長の部活の雑用係ですが。」

普通に事実を伝えただけだったが、よほどギャグっぽく聞こえたらしく少しの微笑をしたあと、やはりハルヒのことはもちろん知っていたようで、「ああ、あの涼宮ハルヒさんね。彼女、元気があつていいじゃない」とこれまた笑いながらハルヒを賞賛した。

元気なのはいいことだが、元気すぎるのはどうかと思うぞ。

「じゃ俺そろそろ行かないとハルヒに怒鳴り散らされるんで。」

俺はそういうと目を合わせずに会釈をし、速歩き気味に立ち去ろうとしたとき、再びその教諭に足をとめさせられた。

どちらかというと自分からとまったというのが正しい引用だろう。

「あなたたち日曜日だったのに頑張ってるわね。まあ、あの彼女ならいろいろやりかねないか：まあ頑張つて。あ、あと朝比奈みくるさんが朝早くからあなたを探してたわよ。なんか随分慌ててたみたいけど。」

優しい声でそういうと手に教科書などを抱えて、俺とは逆方向にスタスタと歩いて行こうとしていた所を俺はすかさずに振り返って呼び止めた。

「ちょっと待て…ちょっと待ってください。」

女教諭はゆっくり振り返る。

「朝比奈さんはなんて言っていました？」

俺は体中に不快な懸念を抱いていた。

「えっ？そんなに彼女のことが気になるのかしら。隅に置けないわねえ。」

「同じ部活動ですから。で、なんと？」

俺の真剣さが伝わったのか、教諭も真剣に考えるような顔をした。

「なんか8時頃、課外授業ないんですかあ？って職員室まできんきて、先生の誰かが答えたのを聞いたら、顔を真っ青にしてどっかに走っていったかったかなあ？で、さっき一回すれ違ったんだけど疲れきった感じで、…くん…って呟きながら歩いてたわよ。多分、あなたを探してたと思うんだけど…」

朝比奈さんが俺を求め歩いているとはなんとも喜ばしいことである。

なんて言ってる場合ではない。

「そうですか。というか、課外は今日からじゃありませんでしたっけ？」

するとその教諭は再び目を三日月のような形にして、練習したかのような綺麗なはにかみ顔を見せた。

「ふふつ。あなたまでなに勘違いしてるの？課外授業は明日から。今日はまだ日曜日よ。平和ボケでもしてるんじゃない？」

口の中に虫ずが走った。

「へ？今日は月曜日じゃないですか。昨日が日曜日でしたよ。」

俺は自分に言い聞かせるかのように言った。

今日が日曜日であるはずがない。

日曜日はSOS団一同、都内不思議探索に行っていて、朝比奈さんとゲームセンターでぬいぐるみをとったわけで、俺の財布の中からは完璧に昨日まであった約2000円が消えている。

俺の動揺したような表現を汲み取ってか、教諭はしょうがないわねといった表情をみせ、証拠を出そうかといった具合で自らのバッグをあさっている。

だが、俺はそんなのみたくもない。

ってかみたところで信じやしない。

「ちょっと失礼します。」

俺はその教諭を尻目に部室へと駆け出した。

朝とは違う種の汗がにじみ出ているのが自分でも感じられる。

「朝比奈さん！」

「ひっ…」

よほどの形相と大きな声だったのだろう。

朝比奈さんはパイプイスに腰掛けていたようで、大きな口を開け、びっくりというような表情をしながらそのイスごと後ろに倒れようかという勢いで跳ね上がっていた。

「朝比奈さん！どうしたんですか、こんな所で。」

わざとらしいとは思ったが、一応聞いてみることにする。

「あつ、きよ…キョンくんっあの…その、昨日は日曜日なのに日曜日じゃなくて、今日は月曜日なのに土曜日で…じゃなくて…あの…すけど…ふえええ」

朝比奈さんはそう言いかけた所で、途中からただの泣き声になってしまった。

振ったのが間違いだったか…なにがなんだかさっぱりわからん。

こういうときこそ古泉にいてほしいものだ。

「朝比奈さん、もっと落ち着いて。なにいつてるかわかりませんよ。」

朝比奈さんに泣きやんでほしいのも本音ではあるが、朝比奈さんが泣き続けている間、誰かが部室の前を通ったりでもしたら一大事である。

このスチュエーションだと誰がどう見たって俺は完全に朝比奈さんを泣かした加害者扱いだ。

そんなぬれぎぬはゴメンだね。

まあそれから数分間、朝比奈さんは意味深な声を出し続けた後、落ち着いたのか、下を向いたまま俺に微かに会釈をし、静かにパイプイスに腰掛けて口を開いた。

「あたしたち、未来人はただ単に時間跳躍ができる訳じゃありません。前にも話したと思うけど時間跳躍にはTPDDっていうのが必要なの。」

朝比奈さんは落ち着いてるような口調で、だけどやはりあどけない

ような顔で話し続けた。

「あつ、まあそれはあんまり関係ないんだけど、そのTPDDを使って、さっき時間跳躍してみたの、明日に。」

朝比奈さんは淡々と言葉を並べた。

ちょっと待て。

相手が朝比奈であろうとも、さすがに俺もツツコミを入れたくなるぞ。

そりゃ古泉なら俺が質問を投げかける間もなく詳しい詳細を含め、どうでもいいたとえ話まで入れて、要求以上の解説をひたすら投げかけてくるだろうが、朝比奈さんはどうにか自分のやったことを伝えるだけで精一杯のようで、古泉並みの解説を期待するのは少々無理がある。

「で、朝比奈さんはなんで時間跳躍なんてしたんですか？しかも明日なんか。」

すると、朝比奈さんは一瞬躊躇うような表情を見せ、俺の方を遠慮気味に上目遣いでみた。

なんとも可愛らしい。

ハルヒの睨み専用の上目遣いとは大違いである。

「聞きづらいかもしれないけど、説明します。」

「いえいえ、お願いします。」

朝比奈さんは今にも鳴き出しそうな生まれたての子犬のように頷いた。

「私、二年生で今日から夏休みの課外授業だったから、キョンくんたちより早く、そう、8時に学校へ来たの。それで、教室に行ったんだけど…誰もいなくて…」

朝比奈さんは少し息詰まるかのような間を作って、

「それで、おかしいなあと思って先生に聞きにいったら今日はまだ日曜日だって笑われて…あたしびっくりして、もしかしたらって思って禁則事項してみたの…。そしたら…ふえっ、えっ」

朝比奈さんは再び泣き出しそうな声を出して、顔を手のひらで覆った。

「ふえっ…明日以降がなかったの。」

朝比奈さんはそういい終えると、それからは一ひたすら泣き続けるばかりであった。

朝比奈さん、言いたいことはなんとなくわかりました。
ですが、言いたいことはわかっていても意味が全くわかりません。
すいません。

「えーと、てことはどういうことなんですか？」

朝比奈さんは自分を軽く落ち着かせたあと、

「簡単にいうと明日以降の未来がないんです」

「なっ……」

朝比奈さんは声を絞り出すようにして、えらく簡潔に結論を述べきった。

ここまでくれば俺でも余裕で理解できるレベルの一大事だ。

古泉的にはどうか知らんが、俺的には閉鎖空間とやらが一部分だけ発生してくれるより10倍はやばい事態だ。

「でもなんで」

うつむいたまま元氣なさげに首を横に振る朝比奈さん。

そりゃそうだ。

原因が分かっているなら今、こんな状況に陥って、焦ってなどいな

い。

それに、今一大事と感じている原因は明日以降が無くなっていること以上に、ハルヒや長門、古泉と連絡がとれないことにある。

この3人、いや、ハルヒはともかく長門たちがいないとなるともうどうすることもできん。

こんなことなら昨日、いや、現時刻的には今日か、古泉ともっと真剣に話しておくべきだったぜ。

ん？

まてよ…昨日が今日ってことはあ

「朝比奈さん、とりあえずここをでましょう。ここにいても拉致が
あかない。」

そう、本来あるべき時間での昨日、俺たちは部屋になどきていない。
もし、昨日と同じことがまた今日繰り返されるなら

「朝比奈さん。昨日、日曜日の午前中はどこでなにをしてましたか。
」

「えつ。えつと…いろいろ歩き回ったあと、何時かは忘れたけどデパートに入って水着を見て…そしてまたいろいろ歩き回って戻ってきたの。」

そう、もし昨日同様の時が今日も流れているのだとしたら、俺たちもまた同じ行動をとっているハズだ。

しかし今、俺と朝比奈さんがあの場にいないとなると、ハルヒ、長門、古泉の3人で行動しているはずであり、ハルヒに限って、俺と朝比奈さんが電話も繋がらず無断欠勤したからといってなにもせずに解散なんてことはあり得んだろう。

きっと昨日と同じルートで昨日と同じ行動をとっているに違いない。デパートでは古泉も大層待たされることであろう、ご愁傷様。

「いきましよう、朝比奈さん」

すると朝比奈さんは手をあたふたとさせた。

「え？どこへいくの。」

昨日、朝比奈さんたちが水着を見た所です。急ぎましよう、時間がない。

朝比奈さんがどこに行くかを訪ね終わる前に俺は朝比奈さんの腕を掴んで適当に歩き出した。

腕をつかんだ後に、朝比奈さんしか水着があつた場所がわからないことに気付いたのはこの際もう気にする必要もない。

俺だって必死なんだ。

そして、曖昧な記憶のもと昨日朝比奈さんたちが行ったと思われるデパートまでたどり着いた。

そのデパートは外見ピンク色をした10数回建てで、1週間に1回くる生活を1年間続けても若者にとつては飽きがこない、ある程度様々なジャンルのものが出揃った場所であった。

人には、デートじゃないからあ。とか、不思議なもの見つけてくること。とか言つといて自分も十分一般的な休日を楽しんでいたんじゃないか。

ハルヒを見つけたらこのハルヒに関わるビルの名前を含めすべて暴露して真相をつきとめてみよう

時計を見ると意外にも時間はあまり進んでおらず、朝比奈さん曰わくでハルヒが到着するまでは余裕があった。

まあ、余裕があったといつても10数分余りしかないわけだが。

しかも、自分では気付かなかったが俺も相当焦っていたのだろう。

あたふたする朝比奈さんに無理矢理突然の道案内を任せたせいか、朝比奈さんは警察犬でもないのに殺人現場の捜査にあてられた野犬のような振る舞いを見せながら俺を案内してくれていた。

「ふう」と何度も安堵の溜め息をしているのが朝比奈さんらしくて可愛らしいのだが、ここは素直にすいませんと謝ることにしよう。すいません、朝比奈さん。

しかし、そんなにゆつくりと構えてる暇はない。

「朝比奈さん」

一瞬ビクツとする朝比奈さん。

「はい。」

「昨日、いや、一昨日行った水着売場までお願いします。」

「え？ふえええええ？」

朝比奈さんは今度は顔を赤面させて本気で驚くようなリアクションをとった。
そうだった。

朝比奈さんには何も説明せずに無理矢理連れてきた…というか道案内を任せたんだった。

今、朝比奈さんは頭の中ではきつと俺と2人で水着を選ぶというシチュエーションが展開されているに違いない。

まあ、俺としてはそれはそれで万々歳なる行事なわけだが今は遠慮しておくでしょう。

朝比奈ファンから苦情のメールボムを仕掛けられそうだ。

まあ、それはもういい。

早くしないと説明に時間をくいそうだ。

そして、大まかに説明を済ませたあと、多分理解してくれた朝比奈さんを先頭に水着売場へと直行した。

さすがの10数回建てということもあり、俺の目から見てもスクール水着からビキニ、Tバックまで様々というのがハッキリわかるほどたくさん種類があった。

改めて朝比奈さんが着せられた水着が気になるってもんだ。

つと、水着に誘惑されている場合ではない。

時間は既に朝比奈さんが提示した時間を少しだけ過ぎている。

ハルヒや長門、古泉がもうすぐここにやってくるはずだ。

昨日の通りならばな。

「朝比奈さん、こっちへ」

「あつ、は、はい」

酔っ払いのような足腰で立つ朝比奈さんを連れ、俺たちは水着売場から少し離れた物陰から水着売場を見張ることとした。

今考えると朝比奈さんがいてくれて助かった。

もし俺1人だつたら端から見れば、水着売場を覗き見るただの怪しい変態程にしか見えんからな。

そんなことを考えながら水着売場を凝視していると、

「あのう、キョンくん」

朝比奈さんは躊躇しているような声を出した。

「どうかしましたか。」

すると朝比奈さんはまた少し顔を赤らめ、

「あの、少しなんか眠く…いえ、眠いわけじゃないんですけど、なんかちょっとボーっとしてて。と、トイレに…」

両手をつじつじさせながら喋る立ち振る舞いもなんとも可愛い光景である。

出来れば水着売場より、こんな朝比奈さんを集中的に見ていたい。

まあ、そんなことをすればお互い赤々々面くらいになってどうにかなっちまいそうだからやめておくでしょう。

「いいですよ。朝比奈さんがいないときにベストタイミングでハルヒたちが来ても、すぐに帰るなんてことはいくらあのアホでもしないはずです。それに、長門や古泉なら俺がここに隠れてみていることくらい、この階に到達したぐらいからもう気付いてることでしょう」

俺が古泉の得意技である、両腕をあげてサッパリだというポーズをとってみせた。

それを見ると朝比奈さんは、そうですね。ゴメンね。と言お添えになって軽い会釈を残し1人トイレへ歩いていった。

出来ればトイレのある場所まで引率してやりたいものだが、今はそんな場合ではないことを理解してほしい。

それに、さすがの朝比奈さんでもこんな、しかも昨日来たデパートで迷うなんてことはないだろう。

とはいったもののやはり朝比奈さんである。

期待は裏切られるとでもいったものか。

家をでる前の天気予報で降水確率0%だったにも関わらず、家をで

た後に大量に雨が降り出し、当たり前のごとく傘を持ってきてないときのニュースに裏切られた気持ちになったようなパターンである。自分でもなにがしたいのかサッパリだ。

でだ。

10分余りが経過したものの朝比奈さんは帰ってくる様子もなく、且つSOS団御一行が到着する様子もない。

やはりハルヒが昨日ここにきた理由は朝比奈さん目的だったのか。

それより朝比奈さんを探すという手間も増えてしまった。

あの朝比奈さんだ、高校生にも関わらず涙声を漏らしながらふにやふにや歩いてそうだ。

それとももしかしたら芸能プロダクションかなにかが、朝比奈さんのあまりの可愛さに声をかけてるやもわからん。

それなら許せるが一般人のナンパとかなら殺す。周りの力を借りてだか。

そんなことを考えているうちにもう30分余りが経過しようとしていたため、そろそろリアルにヤバいんじゃないかと思って来たため、俺はもう来ないと思われるハルヒ達の方を諦め、水着売場を後にした。

こういうときは放送で呼んでもらった方がいいのだろうか。でも、高校生が高校生を呼び出すのもなんか気が退けるな。とはいったもののやはり朝比奈さんである。

期待は裏切られるとでもいったものか。

家をでる前の天気予報で降水確率0%だったにも関わらず、家をでた後に大量に雨が降り出し、当たり前のごとく傘を持ってきてないときのニユースに裏切られた気持ちになったようなパターンである。自分でもなにがしたいのかサッパリだ。

でだ。

10分余りが経過したものの朝比奈さんは帰ってくる様子もなく、且つSOS団御一行が到着する様子もない。

やはりハルヒが昨日ここにきた理由は朝比奈さん目的だったのか。

それより朝比奈さんを探すという手間も増えてしまった。

あの朝比奈さんだ、高校生にも関わらず涙声を漏らしながらふにやふにや歩いてそうだ。

それとももしかしたら芸能プロダクションかなにかが、朝比奈さんのあまりの可愛さに声をかけてるやもわからん。

それなら許せるが一般人のナンパとかなら殺す。
周りの力を借りてだか。

そんなことを考えているうちにもう30分余りが経過しようとしていたため、そろそろリアルにヤバいんじゃないかと思って来たため、俺はもう来ないと思われるハルヒ達の方を諦め、水着売場を後にした。

こういうときは放送で呼んでもらった方がいいのだろうか。でも、高校生が高校生を呼び出すのもなんか気が退けるな。そう考えながらとりあえず速歩き気味に適当に歩き回っていたが、さすがに広すぎるとあってやはりインフォメーションに行って呼び出しをお願いするしかないと確信し、恥ずかしながら朝比奈さんの名前をインフォメーションのお姉さんに告げ、朝比奈さんでも分かるような最上階に呼び出した。

もしもこのデパートに今ハルヒが来ているとしたら、俺と朝比奈さんはこのあと町内を全裸逆立ちで100周させられるくらいの罰ゲームを浴びせられることだろう。来ていないことを祈る。

まあ、そんなこんなで俺は最上階までたどり着いた。といっても数階上がっただけである。

最上階となるとどちらかというと人は少なめで、殺風景という言葉がまさしく当てはまるくらいの店の並びしかない。俺なら確実に来ることはないだろう。

辺りを見回した所、朝比奈さんと思われる人物はまだいないようだった。ので、俺は自販機で微糖の缶コーヒーを購入したあと、隣にあったイスに座って彼女の到着を待つこととした。

目の前にある団子屋から漂ってくる甘い匂いを鼻で味わいながら、ボーっと朝比奈さんを待っていたせいか、俺は徐々に睡魔に襲われた。だした。

疲れていたと言い訳をつけることしよう。

不覚にも、恐らくその5分後くらいにはノンレム睡眠の状態に陥ってしまった。

それからあれだ、俺は相当寝たんだろう。

俺が再び目を開けたとき、俺の中で何かが終わったような、そう、浦島太郎が竜宮城から戻ってきたときの気持ちがあったような気持ちになった。

まさしくその表現で間違いないであろう。

そう、俺は改めて大きな溜め息をつくこととなった。

第三章

第三章

「なっ……」

思わず絶句してしまった。

人間は本当に驚くと何も声を出せなくなると言うことを改めて実感させられたね。

目覚めたばかりの俺が顔を15度ほどあげたとき目に映ったのは、半端じゃなく理解しがたいもので、且つ俺の探し求めていたものだった。

あれだ、どこにでもある子供が遊ぶにはもってこいの浅い川に、3センチほどの小さなカニを捕まえにいったところ、何故か超高級なタラバガニが出現したときのような驚きである。

まあ、わざわざモザイクをかける必要もなからう。

そう、俺の前にスラッとした脚で立っているのは朝比奈みくるさんだった。

「ごめんなさいキョンくん。待った？」

おふざけ染みた笑顔で言う朝比奈さん。

待ったなんてレベルじゃないですよ、もう3時を回っているじゃないですか。

なーんて今更ボケるつもりもない。

「ふざけないで下さい、朝比奈さん。もとの朝比奈さんはどこですか。ってかなんであなたがここにいるんですか。」

わざとらしく質問してみることにする。

もうお気づきであろう、この朝比奈さん、何年後から来たのだろうか：グラマラス体型に超進化を遂げた現代の朝比奈さんの幹部と思われる、大人版朝比奈さんである。

彼女はゆっくり、甘すぎるほど透き通った声で冷静に質問に返答し出した。

「あたし…この時代のあたしは眠らせて2日後の午前9時25分、部室の中へ時間歩行させました。あ、2日後っていうのかループは抜きにして今日から数えて2日ってことね。」

サラッと大変なことを言ってくれる。

今の発言で俺はトンデモ事件に巻き込まれること確定じゃないか。

「で、なんで2日後になんか時間歩行させたんですか？しかもループ

ってなんですか、日曜日がまだ続くってことなんですか。」

朝比奈さんは俺の質問責めにも冷静な対応を見せた。

「この時間にあたしが何人もいるのはおかしいでしょ。それに、この日曜日はループします。それも永遠に。」

朝比奈さんは腕を組ながら目を瞑って、静かな声で囁いた。
やや笑みが見えるようにも見える。

ってかツツコミ所満載だな、おい。
とツツコむ前に朝比奈さんは言葉を続けた。

「キョンくん、なんであたしがここにきたかわかる？」

わからん。知らん。知りたくもない。

が、しかしわざわざ未来から来ている、しかもこんな、美女世界大会に出たら確実に決勝まで行ってしまうような大人版朝比奈さんだ。そんな対応をしては未来から朝比奈さんファンが俺を破つ倒しに来るやもわからん。

もし俺なら確実にそうするに違いない。
ってことで普通に対応するでしょう。

「知りませんが、なんかまた厄介なことになりそうな気はしますね。」

「というか絶対なるでしょ。」

そういうと朝比奈さんは、図星です。と言わんばかりに目を半月の形にして、ニコツと俺に微笑みかけたあと、口元を再び締め直し、自らを生真面目に一転させて、古泉のごとく長々と説明し出した。

「詳しく説明します。」

そういうと朝比奈さんは俺の隣に音をたてずに腰掛けた。

「まずあたちから説明します。今、この時間平面上にあたし、朝比奈みくるとキョンくんは2人います。あたしはさっきまで3人いたけどね。」

いきなりトンデモ発言をなさる。

「どういうことですか?」

「あたしからキョンくんに直接未来に関わるような情報を提供することは禁則なの、ごめんなさい。でも言える範囲で言つとキョンくんは近い未来、今日へ時間歩行する必要があります。あと、今日から明後日の午前9時25分、部室に時間歩行したあたしを迎えに行つてやって下さい。そのとき部室にはまだ誰もいないはずなんです。なんでって聞かれると困るんだけど、理由は類推してください、禁則ですから。」

朝比奈さんはすまなそうに軽く会釈をすませた後、微笑んで続けた。

「まあ、それはまた後々に考えればいいことだけだね。本題はここから。よく聞いててね、一回しか言わないぞ。」

朝比奈さんはお茶目な表情をこぼしながら小学校の先生のようなことをおっしゃった。

ちゃんと聞きますよ。

「今、この時間平面上にはSOS団は全員存在しています。今日のデパートに涼宮さんたちが来なかったのは、近い将来から時間歩行したあなた達が何かしたからだと思います。」

朝比奈さんは言葉を濁すように言った。

なるほど、そういうことか。

将来の俺がなにをやるのかもわかりまくっているが、朝比奈さんが直接言えないこととして扱っている以上、ここは敢えて口に出して言わないこととしよう。

「それで、なんでそんなことをする必要があったんです?」

またわざとらしく質問。

すると、朝比奈さんは

「簡潔に言つと、この時間平面上になんらかのバグが発生したの。原因は不明。そして、あたしたちが見つけてそれを排除する。そうしないとこの時間は本来あつた時間の流れに戻ることはできません。」

と、いうことはだ。

「じゃ、ハルヒたちと連絡がとれないのもそのバグとやらのせいなんですか」

「そういうこと。現代の時間が阻害されている原因は恐らく涼宮さんを狙う一組織です。なんで現代じゃなくわざわざ外部から侵入し、バグを発生させてまでこの時空の歪みを作ったのかは謎です。本人たちに聞かない限りは……」

朝比奈さんは言葉を選ぶような間をときどきあけながら言葉を続けた。

口には出さないが俺にはもうわかっている。

この朝比奈さんがいる以上、この時間は俺たちの手で必ず解決しなければならぬということだ。

俺が未来を変えてしまうことなんてできないし、したくもない。

それに、言葉を濁らせてはいるが、この朝比奈さんは多分すべてを知っている。

なんせ未来人だからな、それも今よりずっと先の。

しかし、禁則とやらで言えないから俺に言える範囲でヒントを出し続けている。

となると俺は朝比奈さんのもと、それを達成すべく従うだけだ。

未来の陰謀かもしれない？

そんなの知ったこっちゃねえ。

たとえそれが未来の陰謀で、俺ははめられているだけだとしても、こんな時間を永遠に過ごしてたくもないし、いつかは見つけられそうな他の方法での脱却も面倒極まりない。

それに、少なくともこの朝比奈さんが俺に将来有害となるようなことをさせるとは思えないし、思いたくもない。

SOS団で過ごす記憶は必ず残っているであろうし、その記憶があるなら朝比奈さんの性格上、そんなことは俺たちにしない。

俺だってしないだろう。

ハルヒを含め、未来人や宇宙人や超能力者やら、俺以外は現代の科学では到底解明も出来ないようなものだが、俺にとっては少なくとも友達以上である。

恋人って意味ではないがそんな勢いだ。

俺はそんなへんてこ集団を大切に思っているし、これからもそうだ。朝比奈さんも、長門も、古泉も、ハルヒだってきつとそうさ。

太鼓判をおしたっていいぜ。

「へ？」

思わず声が漏れ出た。

朝比奈さんは続ける。

「さっきも言ったけど、この時間平面上に何らかのバグが発生しました。このバグを直すには…うんとねえ…キョンくんパソコン少しはわかるよね？」

はい。

「例えばパソコンにウイルスに発生したら、パソコンを修理するしかないよね？それと同じで時間もバグ、そう、涼宮さんを狙う組織っていうウイルスを取り除くしかないの。」

朝比奈さん（大）は、現代にいる朝比奈さん（子）なら絶対にあり得ないような難しい話を淡々と言い放った。

俺には今の話から何一つ類推できん。
わかったのはパソコンと時間のウイルスの処理方法は、基本的に同じってことくらいだ。

「で、なんで過去にいく必要があるんですか。」

朝比奈さんは再び考えこむような仕草をみせ、話をまとめ終わったのか再び話し出した。

「本来時間平面上のウイルスは、大抵処理することができます。で

も今回、時間はこの日曜日をループし続けます。ということは、どういうことかわかる？」

すいません、さっぱりわかりません。
できれば早く結論をお願いします。

「時間が進まないってことは、いくら処理をしたところで無駄なの。詳しく説明するともう意味がわからなくなるから説明しないけど、簡単にいうと根本的な所を処理しないかぎり、あちら側のブロック、つまり日曜日のループで何度も上書きされてしまっわけです。」

朝比奈さんは自分の役目を全うしたような表情を見せた。
正直、なにがなんだかさっぱりわからん。

「まあ、どっちにしろ過去に戻る必要があるんですよ。それで過去でその組織とやらを撃退すると。」

「その通り。」

朝比奈さんは人差し指を立てて、ニコツと笑顔を作った。
俺としては全く笑えない。

「で、いつに時間跳躍するんですか？」

「6月27日の午前1時15分です。」

朝比奈さんはサラリと日にちを言いさばいた。

6月27日だつて？

期間とすれば今から約1ヶ月ほど前だ。

別段なにか起きたというわけでもなかったような気がするが、なにしろなんかの組織だ。

俺が知るはずないし知りたくもないってやつだったパターンだな。

「1ヶ月ですか。この問題を解消するにはそこにいくしかないんですね。」

朝比奈さんはコクリと頷くと、俺と向かい合って俺の両肩に手のひらを添えた。

朝比奈さんは立った状態から俺の肩に手のひらを添えているたむ俺の視界には、いつも学校にくる際早朝から苦しむ早朝ハイキングコースの一万倍はキツイような急傾斜の胸の谷間がいやがうえにも飛び込んでくる。

どんなにキツくてもそっちを登るほうが一億倍は楽しく登れそうだ。

朝比奈さん、正直理性が保ってられません。

と、その瞬間俺の視界からそれらの全ての物体が消え、暗影を覚えると共に真っ黒に染まった。

俺はどれくらい寝たのだろう。

工事中に聞こえてくるドリルのうるさい音を1日中至近距離で聞き続けていたような頭痛に襲われたあと、俺は朝比奈さんの顔を至近距離にみるとともに飛び起きた。

「うわっ!!」

俺の驚きをみて、ささやかに笑う朝比奈さん。

「ここは…じゃなくて今はいつです」

朝比奈さんは腕を組みながら顔を引き締め、

「6月27日、午前1時15分です。」

もう来ちゃったのか。

大人版朝比奈さんは朝比奈さんとは違って、こういうことは手荒いんだよな。

などと考えながら俺は両手で自分の顔を叩き、朝比奈さん同様顔を引き締めてみようと思ったが、ただ痛いだけなのでやめることにする。

「朝比奈さん、いきましよう。こんな微妙な時間ってことはあまり時間がないんでしょう。」

朝比奈さんは頷き、「あたしについてきてください」というと速歩き気味に道を歩き出した。

まあ、結論からいうと歩いたのはほんの200メートルあるかないかで、2分弱でたどり着いた。

真夜中ということもあり、道に殆ど、いや、全く人影はない。

暗中模索したところで何ひとつ見つかりそうにないくらいに静まり返っていて、響くのは俺と朝比奈さんの足音くらいだ。

「つきました。」

朝比奈さんは俺のほうを振り返り、籠もらせたような声で俺のほうをみた。「ここなんですか？」

朝比奈さんが立ち止まった場所は明らかに見覚えのある場所だった。ほかす必要もない、そこは紛れもなく長門のマンションの目の前だ。ここにくるときは何かしら事件に巻き込まれるというジンクスがあ

る以上、ここには来たくなかったがしょうがない。
もうフロイトでもピカソでも出てこいって勢いだ。

「じゃ、いきましよう朝比奈さん。」

珍しく元氣よく覇氣のある声で踏み出した俺を朝比奈さんは左手を軽く出して制した。

「キョンくん、静かに。あたしたちは長門さんのマンションに入るわけではありません。っていうと齟齬が生まれるけど、今はまだこっちです」

そついうと朝比奈さんは長門のマンションを背に、脇道をひたすら歩き出した。

俺にもう少し説明してから行動してほしいものだ。

朝比奈さん（子）もいつもこんな感じなんだろう、かわいそうに。
まあ朝比奈さんの場合、自分が自分にしていることだからしょうがないもんなのかね。

長門が住むマンションから100メートルほどだろうか。

俺と朝比奈さんは長門のマンションの入り口がギリギリ見えるくらいのところで立ち止まり、そこらへんにあつた植え込みへ影を潜めることとなった。

端からみたらただの探偵気取りの変な男女にしか見えないが、誰も

いないから気にする必要もない。
警察に補導されるなんてことは御免だぜ。

「あの、朝比奈さん、ここでなにを。」

「来ました。」

朝比奈さんは一言だけそう言うと、長門のアパートの入り口を指差した。

俺がその方向へ視線を向けると、入り口から人影が出てくるのが見えた。

「……長門？」

そう、そこから出てきたのは北高の制服を着た小柄なショートヘア
ー、間違いなく長門有希だった。

こんな時間に散歩か。

長門にも意外な趣味があったもんだな。

なんてボケる必要もなかつた。

きつとこのあとにかしら起きるに違いない。

なんせ大人版朝比奈さんがわざわざつれてきたんだ。

長門の秘密の趣味が散歩、なんてことを言い出した暁にはさすがに朝比奈さんでも容赦なく殴りがかるだろう。

いや、殴りかかるのはやりすぎか、やはり一発軽く頭を叩くだけにしよう。

なんてことはどうでもいいことだ。

なんのために長門は外へ…

俺がそう考えながら顔をしかめているのを朝比奈さんは見ていたのだろうか。

恐らくみていない。

そんな暇もなく、俺の表情はしかめっ面から疑問詞が100個くらいついたような表情に豹変したからだ。

俺の視線の先、長門有希は5秒ほどマンションの入り口辺りで静止して立ち尽くしていた。

今思えばきつと呪文なんかを唱えていたんだろうなと俺は思う。

「……っ！」

言葉に詰まって言葉にならないとはまさしくこういうことを言うんだろうな。

長門はその静止を解いた次には空中を舞っていた。

舞っているといっても蝶のようにゆったりと空中浮遊を楽しんでい

るわけではないぞ、わかっていると思うが。

長門は、その立っていた位置から爆中の5メートルバージョンみたいな感じで勢いもつけずに空中へ飛び上がった。
なにがしたいのか俺にはもうさっぱりわからん。

「朝比奈さん、これはいつたい…」

呆然とする俺の口からでた言葉を、朝比奈さんは長門から視線を離さずに一言だけ言った。

「よくみてみてください、キョンくん。」

すると朝比奈さんは再び長門の意味不明行動観察に没頭してしまっ
た。

なんだってんだいったい。

よくみる？ホワット？

見たってただ長門が飛び上がったか呪文を唱えたりしているだけだ。
長門なりの緊急時の練習とでもいうのか。

それともなんだ、やはり朝比奈さんは俺に長門の趣味をみてほしか
っただけなのか。

俺が朝比奈さんの後ろから疑いをかけるような目で見ると、気配を察したのか、未来から来たからもうわかっていたのか、俺が発言する前に言葉を続けた。

「もう1人います、長門さんとあともう1人。」

俺はそれを聞いて反射的に長門のほうを凝視した。
言われてみればそう見えなくもない。

長門の表情をくみ取るとはさすがに無理であるが、時々何もして
いたいのには長門の体がなにかにぶつかったように揺れ動いたりして
いるようにも見える。

朝比奈さんのみせたかったものはこれってわけだ。

「で、だれがいるんです？あそこには。」

「わかりません。」

朝比奈さんは即答した。

自分で確かめろってことかい。

俺と朝比奈さんはそのあと長門を凝視し続けた。
それで、1つ気付いたことがある。

長門は戦っている。

薄々は気付いていたが今となってはもう間違いない。
なんでって。

呪文を唱えたり飛び上がったたりしてるのもあるが、一番は偶に長門
の体が攻撃を受けているような素振りをみせることだ。

しかもそれは長門にしちゃあてこずっているようで、もうあれこれ
五分は同じような行為を繰り返している。

一般的に見たら五分なんてカップラーメンが出来るのを二回分待つ

より短いくらいだが、長門が戦う五分つてのはとんでもなく長い。

長門ならどんな相手でも一分もあれば玉砕してしまいそうな感じがするからな。

で、となると長門と戦っているのは長門と敵対しているなにかしらの組織に所属するやつってわけだ。

まさか古泉や朝比奈さんの機関じゃなからうな。
なわけないか。

「終わります。多分。」

朝比奈さんは再び口を開いた。

俺には何故かわからん。

緊張しているのか、言葉が途切れ途切れなのは気のせいだろうか。

「終わるって、この長門の1人サーカスがですか。でもこれ、みるだけでよかったんですかね？」

朝比奈さんは俺の冗談を軽く受け流した。

「今はみるだけでいいはずです。あつ、長門さんが。」

その言葉と共に長門のほうをみると、長門は何事もなかったかのよ

うに、スタスタとマンションの中へ入った。
もう少しアクションでもとってくれば少しはわかるんだが。

長門のリアクションを想像してみる俺。
やめておこう。

あいつが大袈裟にリアクションなんかとっているところを見た日には世界が滅びそうだ。

「朝比奈さん、今から長門のマンションに行くんでしょ。俺の予想ですけど。」

朝比奈さんは腰をあげて、体のブレなく立ち上がった。

「はい…」

朝比奈さんは緊張な面持ちで返事を俺に返し、深呼吸をした。
長門に対するやりづらは今も昔も変わっていないようだ。
つてか長門と話すときにまともに渡り合えるやつの方がなかなか珍しい。

このSOS団にはそういう奴らが集まっている気がするが…
「いきましよう。キョンくん。」

そついうと朝比奈さんはゆっくりと歩き出した。といっても100メートルほどだが。

俺と朝比奈さんはすぐに長門のマンションの入口にあるセキュリティ
イーロックの前までたどり着いた。
いつの間にか俺の前を歩いていった朝比奈さんが後ろに後退している
のは気にしないでやってほしい。

そして俺はいつものように長門の部屋番号をセキュリティシステムに
手際よく入力する。

「……………」

無言の返答

「長門、俺だ。朝比奈さんもいる。」

「……………」

無言が三秒と続かぬうちに返答の代わりに自動ドアが開かれる。

「いきましょう、朝比奈さん。」

無言で微かに頷く朝比奈さん。

朝比奈さんまで長門にならなくてもいいのに。

長門の部屋の前までたどり着いた俺と朝比奈さんは、長門を呼び出す前にドアを開けた長門に呼び込まれ、リビングまで案内された。といっても、皆知ってるよう長門の部屋は一室しかないのかというほどスツキリしている。

あるのはテレビと小さなテーブルだけだ。

生活感0ということもあり、リビングというには似つかわしいかもしれない。

「座って」

長門の小さな声が部屋に響く。

朝比奈さんは律儀にもしっかりと正座して両手を腿の上に添えて斜め下を向いている。

そんなに緊張しなくても。

「長門、それでなんだが」

俺が座りながら長門に話しかけると、

「わかつている。」

長門には全てお見通しのようだ。

「わかつてるって、どついうことだ。」

長門は言葉をわかりやすく纏めるような間を少しばかり作つた後ゆっくりと俺の方を見た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3975m/>

涼宮ハルヒの別冊

2010年10月16日09時17分発行